



ジュニア大使 OB 本を出版

～2019年パラオ班参加 森下 礼智～

『苦手と得意が激しい僕が好きなのを見つけたら毎日が楽しくなり将来が見えてきた～「みんなちがってみんないい」ってなんだろう?』

(単行本、2023年12月18日発売)

●本を出版するまで

今、高校生の礼智さんは、小さいころから苦手なことが多く、両親は就学相談に行くなど、息子の将来に悩んでいました。苦手さからか小学校で居場所がなくなり、不安な様子の息子を心配した母親は、学校以外で講座や体験学習に親子一緒に参加。その中で、小2のときにコンピューターのプログラミングと出会い、好きが得意になり、より専門性の高い場を求めるようになります。VR (Virtual Reality: 仮想現実) 作品や科学の世界で賞を受賞し、小5の時、「孫正義育英財団」の第2期団員生に合格。そこでの活動で得意がさらに加速し、「ギフトド」(gifted:

優れた才能を持つ人)と言われるようになりました。そして、小6でジュニア大使パラオ班に参加したのです。

出版本の1部では、特に学校での書字の苦手、文字がうまく書けないことをICT (Information and Communication Technology: 情報や通信に関する技術) でタブレット等に入力することで補い、自分を知り、居場所を探すまでが書かれています。2部では、得意をどう見つけ、どう伸ばしていったのかを数々の場面とともに紹介しています。

●感想文 (ジュニア大使に参加して)

僕は海外には毎年親と一緒に行っていましたが家族と離れホテルの部屋に一人で泊まるのははじめてでした。僕の親はその為とても心配していました。しかし、僕自身はパラオがどんな国なのかワクワク感が強く親にはとても申し訳ないのですが飛行機に乗る時には寂しさは全くなかったです。一晩



2019年パラオ政府訪問、前列向かって右

明けてみたパラオの海は青くて透明でとても綺麗で感動しました。僕は毎日オンラインで海外の先生と英会話を勉強していたものの実際、きちんと自分の話したい事を日本語と同じ様にスラスラ伝える事は出来なかったけれど受け入れて下さった学校の皆さんもホストファミリーもとても親切でパラオが大好きになりました。また団長先生をはじめ一緒に行ったメンバーも親切で生涯忘れられない旅になりました。

第36回春期ジュニア大使友情使節団 2024年3月実施 団員募集

若く感受性の豊かな子供たちが国際社会への理解や外国語への関心を深め、様々な文化に接し相互理解を深める一方、日本人として誇りと自信をもち、世界の人々から信頼されるような立派な人に育って欲しいと願い、1985年に「ジュニア大使友情使節団」を組織し、39年目を迎えます。

訪問先の公的機関の後援を得て実施しています。米春の概要は以下の通り。

- 実施機関: 一般社団法人国際フレンドシップ協会
- 主催旅行社: 株式会社エイチ・アイ・エス 法人営業部アジアナビリティ事業推進デスク
- 後援: パラオ共和国教育部
- 研修期間: 2024年3月28日(木)～4月3日(水)
- 参加資格: 小4以上20歳未満、10名～15名
- 参加費用: 574,000円 (燃料リチャージ、出入国税等は別途)
- 応募方法: ホームページ応募フォームより
- 応募締切: 令和6年1月29日(月)
- 説明会: 令和6年1月27日(土)14時オンライン

問合せ先: 一般社団法人国際フレンドシップ協会 担当: 中山、及川

〒106-0041 東京都港区麻布台 3-4-12 麻布台ロイヤルプラザ703

TEL 03-3582-3021, FAX 03-3582-3010, E-mail: junior-ambassadors@ifajapan.org



ジュニア大使の思い出と現在



ねづ あおぼ  
根津 青葉  
INNER-MINDS-EYES  
Artistic Director  
国際武道大学 特任助教  
ジュニア大使友情使節団  
第13回アメリカテキサス班  
第15回イギリス班参加

ジュニア大使として米国・テキサスと英国で感じ経験したことが、その後の私の人生に多大な影響を与えることになるとはその当時は思ってもいませんでした。小さい頃から海外に漠然とした憧れがありました。今思うときと私の小中学校での経験からきているのだと思います。物事の好き嫌いははっきりしており思ったことを何でも言うてしまう性格だったので、学校生活やそこでの人間関係に馴染むことが全くできず、「どこか遠くへ行きたい」、「自分を理解してくれる人たちと生きたい」と思っていました。そんな私に母がジュニア大使への参加を薦めてく

れました。中学生のときに行ったアメリカ、そして高校生で行ったイギリス。体いっぱい感じた異国の空気は「自由」そのものでした。その時、初めて海外で勉強してみたい、海外で仕事してみたい、と強く思いました。

私は3歳からバレエを学んでいました。バレエだけではなく音楽に合わせて踊ることが大好きで、学校でもダンスの振付を任せられたりしました。将来はダンス関係の仕事に付きたいとぼんやりと考えていたのですが、ジュニア大使で行ったテキサスのある公園で黒人の子供達が音楽に合わせて踊っているストリートダンスを見て、私の道は決まりました。あの自由で独創的な身体表現、それも私と歳が変わらない子供達たちのキラキラした表情が私の心に衝撃を与えたのです。こんなダンスを踊れる人になりたい。そう思いました。

2度目のジュニア大使で行った英国では、様々な国籍・文化の人達が戸外で自由に体いっぱい踊る姿を見て、多国籍・多文化のこの国でダンスを学び、ダンスを皆と踊ろうと決めたのです。

こうして、私は高校卒業前に渡英し、ローハンプトン大学でダンスを学び、またベッドフォードシャー大学でダンスとテクノロジーの博士号を取得。学びながら、ダンサーとして様々なステージに立ち、欧州やアジアツアーなどに参加し、ロンドンの教育機関でダンス講師として活動しました。2012年のロンドン・オリンピックでのオープニングパフォーマンスにも参加し、09

年に仲間とダンスカンパニーを立ち上げ現在もアーティストディレクター・振付師として活動しています。今は日本が拠点ですが、海外と行き来するこのライフスタイルが「私らしい」生き方だと感じています。



現地で学び仕事し生きる中で、現地では経験できないことは沢山ありました。もちろん、辛い経験の方が多いです。言葉の壁、文化の違い、そして人種差別。外からは分からない過酷な経験に沢山泣きました。何度も諦めて帰ろうとも思いました。ですが、それ以上に得たものが大きかったです。沢山の友人、共に高みを目指してきたダンス仲間が私を支えそして私を強くしてくれました。この異国の地が私の「第二の故郷」になりました。

「ジュニア大使友情使節団」は民間レベルの国際交流活動を促進し、世界の平和に貢献することを目的に小・中・高校生を海外に派遣する事業です。派遣先国・地域の政府や公的団体の後援の下、1985年に開始し、これまで3,762名のジュニア大使が誕生しました。問い合わせ先: junior-ambassadors@ifajapan.org ☎ 03-3582-3021 ジュニア大使係





いま  
ジュニア大使の思い出と現在



みうら ひろゆき  
三浦 博之  
写真家  
第10回ジュニア大使  
友情使節団  
オランダ班参加

ジュニア大使としてオランダに行った経験で得たことは何か、それは知らない世界に飛び込んで行くことへの抵抗をなくすことができたことだと、今は言えます。小さい頃から漠然と海外への興味はあり、テレビでも内容はよくわからずとも海外のドキュメンタリーなどを好んで見ていました。そんな思いを知ってか知らずか、父が新聞でジュニア大使友情使節団の記事を見つけて私に参加を勧めてくれたことで、初めて海外と生身の自分自身が繋がるきっかけを掴むことができました。

参加を決める際に不安はありましたが、オランダでの1週間はその不安を払拭する充実した日々でした。その後、海外志向まっしぐらとはいかず、中学

高校は部活動中心の生活でそのまま大学に進学。大学1年生のときに米国・同時多発テロの様子をテレビで見たことはその後の人生に大きな影響を与えました。中継を見ながら大変なことが起きているという認識と、自分には何もできない現状、遠く離れた場所で今起きていることをテレビで見ているという違和感。事が起きている現場に自分自身がいたいという思いが生まれた瞬間でした。1年回り道しましたが毎日新聞に就職。写真部に在籍して国内外で起きた事件、事故、政治、社会、スポーツの現場で10年間、様々な写真を撮りました。特に東日本大震災とリオ五輪は写真としても経験としても忘れられない取材になりました。

東北では現実を超えるような凄まじい光景を目の当たりにし自分の仕事の意味を考えました。写真を撮ることが仕事ではありましたが、それ以前に何か自分にできることはないのか。様々な葛藤を持ちながら被災地を歩きました。震災翌日に到着した岩手県の陸前高田市では、夕暮れ後に明かりが一切なくなり、見上げた空に広がる満点の星に、何とも言えない感情が湧いたことは忘れられません。

ブラジルではアスリートの躍動する姿を最高の舞台で撮影する喜びを実感しました。連日朝から深夜まで競技を撮影しては移動を繰り返し、身体的には非常にタフな3週間でした。五輪での撮影のために国内外での選考会の取材を重ねたので、本番では気持ちに余

裕をもって撮影を楽しみました。



リオ五輪会場

10年で新聞社を退職した後は、いい流れ(仕事)があればそれに乗るという生き方を選び4年が経ちます。北アルプス奥地の山小屋や建築現場での仕事などを直感で選びました。今は映画の仕事をしています。もともと映画好きで映画館には足繁く通っていましたが、在職中に参加したワークショップがきっかけで映画に出演しました。そこで出会った人達との繋がりで映画撮影の仕事を得たのです。これから先どれだけ映画の現場に携われるかはわかりませんが、どんな仕事でも自分の直感に従い、いい流れに乗り続けたいと思っています。

「ジュニア大使友情使節団」は民間レベルの国際交流活動を促進し、世界の平和に貢献することを目的に小・中・高校生を海外に派遣する事業です。派遣先国・地域の政府や公的団体の後援の下、1985年に開始し、これまで3,762名のジュニア大使が誕生し、帰国後も「ジュニア大使クラブ」等を通して、国際交流活動が広がっています。問い合わせ先: junior-ambassadors@ifajapan.org ☎ 03-3582-3021 ジュニア大使係



いま  
ジュニア大使の思い出と現在



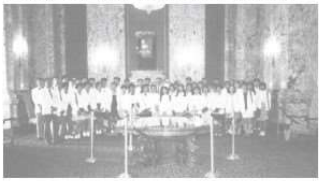
つのだ けん  
須藤 建  
株式会社 岩波書店  
第11回ジュニア大使  
友情使節団  
シアトル班参加

もう20数年前のことになりますが、「ジュニア大使」に参加したときのことは深く心に刻まれています。当時は高校1年生で、パスポートを取るのも、海外に行くのも初めてでした。

出発前の事前研修で、ジュニア大使の事業を始めた横山総三さんが、「有難う」という言葉の美しさについて語られたのを覚えています。私はそれまで自分の話す日本語についても、日本の文化についてもあまり深く考えたことがなかったのですが、海外に出ればどうしても「日本人」の一人として見られますし、また「大使」として行くわけなのだから、それにふさわしい振舞いをしなさい、という趣旨のお話には納得がいくものがありました。

同時にそれは自分たちの文化について誇りを持ちなさい、ということだったのではないかと思います。自分たちが話す言葉、そこに宿る文化にすでに大切なものがある、というお話は、初めての海外を前に不安だった私にとって、心強いものがありました。

滞在先はシアトルでした。シアトル・パシフィック大学の寮に滞在しましたが、そのほか、数日間のカナダ・ウィクトリアの滞在で19世紀の面影を感じたり、在シアトル日本国総領事に公邸でお会いしたり、ワシントン州政府表敬訪問、そしてホームステイがありと、非常に充実した2週間でした。



ワシントン州庁舎にて

生まれ育った街を離れても、年が同じぐらいの、それもお互いに関心が近い仲間に出会えたこともまた嬉しいことでした。朝の早い時間にアメリカの学生たちとバスケットボールをして一方的に圧倒されたり、たまたま食事の味に愚痴を言い合ったり、一緒に経験する仲間がいたことで、どれも楽しい記憶になったのだと思います。

ジュニア大使に参加したことで何が得られたのか、振り返って考えてみる

と、一番大きかったのは、私の場合、英語という外国語を使うことへの自信だったかもしれません。といっても、当時の私は公立の中学校で英語を3年間学んだだけです。それでも思い切って話してみれば、通じることの方がはるかに多く、そのこと自体が喜びでした。もちろん、それはホストファミリーの方や、受け入れ先のスタッフの方が優しく、根気強く対応してくださったからだと思っています。

本好きの私は、ホストファミリーの方にどこに行きたいかと聞かれ、本屋さんと答えました。そのときに買った本は帰国後に辞書と引っ引きでなんとか読み通し、今でも本棚にあります。

参加後の感想文に、「ここで学んだことを、私は決して無駄にはしない」と書いたのを覚えています。現在は仕事で海外のノンフィクションや児童書の翻訳出版に携わっています。そうした仕事をできるようになった根底には、このときの経験があると思っています。

「ジュニア大使友情使節団」は民間レベルの国際交流活動を促進し、世界の平和に貢献することを目的に小・中・高校生を海外に派遣する事業です。派遣先国・地域の政府や公的団体の後援の下、1985年に開始し、これまで3,762名のジュニア大使が誕生し、帰国後も「ジュニア大使クラブ」等を通して、国際交流活動が広がっています。問い合わせ先: junior-ambassadors@ifajapan.org ☎ 03-3582-3021 ジュニア大使係





## いま ジュニア大使の思い出と現在



なかやま たいし  
中山 大志  
北海道旭川東高校1年  
第33回  
ジュニア大使友情使節団  
パラオ班参加

2018年に参加したジュニア大使パラオ班は、間違いなく自分の人生に大きな影響を与えていると、4年が過ぎた今、改めて感じています。そもそもあまり行くことに乗り気ではなかった僕が、今このように感じる事ができていることに驚くとともに、行って良かったと思っています。そんなジュニア大使の思い出と現在について、少しここにまとめてみようと思います。

まず思い出についてですが、自分の中で一番思い出に残っていることは、やはりホームステイです。当時、小学6年生だった僕は当然英語なんてしゃべれるわけがなく、不安でいっぱいでした。しかし、持って行った和英辞典を使いながら、なんとかコミュニケー

ションをとり、自分が伝えたいことが伝わったときには、とても嬉しかったのを覚えています。

また、この英語のみで生活をするという経験が、自分の英語力が身につくことにもつながっていると思います。



戦火の跡の前で皆でご冥福を祈る

もう一つ思い出に残っていることはペリリュー島を訪れたことです。ペリリュー島は太平洋戦争時に日米の戦場となった場所であり、そこには戦争の傷跡が多く残っています。そこで感じたことは、戦争の悲惨さ、そして平和の尊さです。その思いは絶対に忘れてはいけないうことと今感じています。

余談になりますが、僕は広島カーブのファンで、ペリリュー島から5kmのところにある小さな島、世界遺産のカーブ島に行くことができたこともいい思い出です。

続いて、僕の現在について書こうと思います。現在、高校1年生で、もちろん英語の授業はあります。英語力が身につくことにつながったと前述しましたが、実際のように感じることは

多々あります。例えば、ALTの先生と会話をするときなど、簡単ではありますがやりとりができるということです。おそらく、英語で話すことを小学6年生から経験できたことが今につながっていると思います。もちろん、文法などを学んだので理解できるということはありますが、英語力の根本はホームステイの経験からきていると感じています。

総じて、平和の尊さを知ることができたことは大きいことでした。平和が尊いものであるということは、誰もが知っています。しかし、どんな知識も自分が経験したことの方が心に深く残るのです。この深い知識を手に入れることができたことは自分の中の大きな武器になっているはずです。

このように自分の人生に大きな影響を与え様々なことを教えてくれたジュニア大使での経験。この経験が将来、さらに大きなものになっていく、いや、していきたいと思っています。

「ジュニア大使友情使節団」は民間レベルの国際交流活動を促進し、世界の平和に貢献することを目的に小・中・高校生を海外に派遣する事業です。派遣先国・地域の政府や公的団体の後援の下、1985年に開始し、これまで3,762名のジュニア大使が誕生し、帰国後も「ジュニア大使クラブ」等を通して、国際交流活動が広がっています。問い合わせ先: junior-ambassadors@iia-japan.org ☎ 03-3582-3021 ジュニア大使係



## いま ジュニア大使の思い出と現在

まりお 絵里佳 (旧姓:吉田)  
カフェCUP of JOE 経営  
第16回ジュニア大使友情使節団  
アラバマ班参加



私がこの研修に参加したのは21年前、母親の勧めで、当時、茨城県鉾田町が募集していた、「ジュニア大使」に何気なく応募したのがきっかけでした。

アメリカは旅行好きの両親に連れられ何度か行ったことがありましたが、家族以外と海外に行くことは初めての経験でした。しかもアラバマ州という日本人が観光では行かないであろう土

地の現地の人々の家で数日間ホームステイしたことは一番の思い出です。家には広い屋根裏部屋や大きいプールがありワクワクしました。ホストファミリーの子供たちや友達は私より年下でしたが、偏見を置いていたり、様々な髪色・髪型だったり、日本の常識と全く違うことに驚きました。ホストマザーはあまり英語が分からない私にとても優しく接してくれ、毎朝サンドイッチやリンゴを入れたザ・アメリカンなランチをかわいいうちバッグに持たせてくれました。このランチバッグは帰るときにプレゼントとして持たせてくれて、日本へ帰国後も学校で得意気に使いました。用意してくれたベッドルームには電気を消すと天井に光る星が貼ってありました。これはとても気に入って、数年前に自宅を建てた時、子供部屋の天井を光る星の壁紙にしてみました。大人になり母親になった今、あのホストマザーは何で寛大で素敵だったんだろうと感心します。

研修は短期間でしたが、とても濃い貴重な時間でした。そして、「大使としてアメリカへ研修に行った」という事が当時14歳の私の自信になりました。丁度、研修に参加した頃は人間関係などで生きづらさを感じていた時期でしたが、この研修を通し日本と全く違う世界を見て気持ちの成長を感じました。

通っていたキリスト教系の私立校には、系列校がアメリカにも何校もあり、高校卒業後に留学しました。1番日本人が少なそうなネブラスカ州の大学を

選びました。卒業後は、日本人対象に就職を斡旋している会社を通して、インディアナ州にある日本企業の支社で工作機械を作る会社に採用されました。未経験でしたが「笑顔が良い」という理由で受かったようです。仕事は楽しく、何より大きな感謝で、多様性を受け入れてくれる会社でした。今でも大学や会社の友人とは折々連絡を取り合っています。

米国での暮らしは9年弱でした。現在は地元に戻り、ブラジル人の夫とカフェを営んでいます。田舎ですが意外と外国人のお客さんもいらして、英語を使う機会があります。二人の子供にも恵まれました。将来、この子たちも色々な経験をして国際的な人になって欲しいです。「ジュニア大使」の研修の全ての関係者と行かせてくれた両親には本当に感謝しています。これからも末永く、そして多くの子供たちが私のように一生の思い出になる経験ができるように願っています。

「ジュニア大使友情使節団」は民間レベルの国際交流活動を促進し、世界の平和に貢献することを目的に小・中・高校生を海外に派遣する事業です。派遣先国・地域の政府や公的団体の後援の下、1985年に開始し、これまで3,762名のジュニア大使が誕生し、帰国後も「ジュニア大使クラブ」等を通して、国際交流活動が広がっています。問い合わせ先: junior-ambassadors@iia-japan.org ☎ 03-3582-3021 ジュニア大使係





ジュニア大使の思い出と現在



あきはら ともこ  
笠原 朋子  
京都大学高等研究院  
特定助教  
第12回  
ジュニア大使友情使節団  
シアトル班参加

私は京都大学 iPS 細胞研究所で腎臓再生の研究により博士学位を取得し、理化学研究所やスウェーデンのカロリンスカ研究所などでゲノム研究に取り組みました。現在は京都大学高等研究院に特定助教として勤務し、再生分野の知見を活かしながら、腎疾患の機序(しくみ)を解明する研究に従事しております。私の研究の目的は一人でも多くの腎臓病に苦しむ方たちを救うことです。私の研究は小さな一歩かもしれませんが、世界の医学の最先端研究に寄与し人類を救うのだという目標が常に視野の中にあります。

さて、私は幼稚園児の頃までは、人見知りをする控え目な子供でした。幼

稚園では一人で落ち葉を拾いながら、みんなが砂場で遊んでいるのを傍でじっと観察していました。それでも小学生になるとずいぶん前向きになりましたが、いろんな人々と積極的に交流するというほどではありませんでした。そんな私のことをよくご存じの中学の担任の先生から「ジュニア大使」への参加を勧められ、家族の理解を得て参加することになりました。

年齢の異なる初対面の「ジュニア大使」が全国から集まって来るのですから、初めはとても不安でしたが、事前研修で互いが打ち解け合うような環境を作っていただいたお陰で、短期間に信じられないほど仲良くなれました。この研修は文化や言語が異なる海外での活動ですから、日常の学校生活に比べても互いの支え合いの大切さを思い知りました。一人では達成できないことも協力し合えば、どこにでも行けるし何でもできる、ということを実感できたのはこの時が初めてでした。

それまでに、家族と海外旅行には何度か行ったことがありましたが、海外で生活するのは初めてのことでした。ましてホストファミリーと一緒に「暮らす」という経験は、多感で純真な時期の私に多くの刺激を与えてくれました。当時の私はホストファミリーのことを「第二の家族」だと感じていました。外国人で異教徒である私を本当の娘と同じように対応して下さいたことを実感し感動しました。中学生の私はアメリカ人の心の温かさと包容力の

大きさを感じ取ったのです。今思うと、日本文化には隠れがちの、アメリカならではの違いを認め多様性を大切にするという側面に触れて感動したのです。



カロリンスカ研究所での研修 2020年

そうした経験があったからか、仕事に就いてから、様々な国の研究者が集まる研究所でも積極的に意見交換をしています。まだ、志半ばの私が言うのもおこがましいのですが、研究は一人ではなく助け合うことであり、また、多様性を認め合い、みんなと議論し合うことだと思います。「ジュニア大使」でのこれらの経験は、現在の私に「どこでもドア」を開いてくれたのです。

「ジュニア大使友情使節団」は民間レベルの国際交流活動を促進し、世界の平和に貢献することを目的に小・中・高校生を海外に派遣する事業です。派遣先国・地域の政府や公的団体の後援の下、1985年に開始し、これまで3,762名のジュニア大使が誕生し、帰国後も「ジュニア大使クラブ」等を通して、国際交流活動が広がっています。問い合わせ先: junior-ambassadors@ifajapan.org  
ジュニア大使係 電話 03-3582-3021



ジュニア大使の思い出と現在



かとう なおこ  
加藤 直子  
(旧姓: 原)  
お茶の水女子大学  
非常勤講師  
第6回  
ジュニア大使友情使節団  
マレーシア班参加

私がマレーシア班に参加したのは、小学校5年生の時でした。今から約30年前のことになります。長野県から14名参加した一人です。

マレーシアでは、現地の小学校を訪問し、日本語を学ぶ子供達と交流しました。日本に興味を持ち学んでくれている小学生がいることに驚き、習った日本語を使って目をキラキラ輝かせながら話しかけてくれる姿に心が大きく揺さぶられました。マレーシアの童謡「ラサ・サヤン」をみんなで歌ったことは、今でも鮮やかな記憶としてよみがえります。ホームステイ先の家族もとても親切にしてくれました。初めて過ごす現地の家庭での数日間。トイレ

の使い方、食事の仕方、挨拶の仕方、商店街での買い物、すべてが新鮮でした。英語がほとんど話せない私は、ポケット辞書を持ちながら、分からない単語を辞書で引いたり、ホストファミリーの方に辞書を引いてもらったり、単語とジェスチャーだけでなんとか過ごしました。短いホームステイでしたが、最終日には別れが惜しく自然と涙が溢れました。

マラッカの街を訪問したときには、アジアの中にオランダの建物があると知り、当時の歴史に思いを馳せました。

帰国後も、温かく迎えてくれたマレーシアの方々のこと、マレーシアで日本語教育が盛んだったことがずっと心に残っていました。そして、自分も日本語教育に携わりたいと思い大学院へ進学し日本語教育について学びました。

現在は、大学で留学生に日本語や日本文化を教え、学生をサポートする仕事をしています。留学生に日本文化を教える授業では、出身国について発表する課題を出します。出身国の行事、食べ物、ファッションなどについて、日本語で発表する留学生の姿から、私自身も学ぶことが多く、「教育は共育」であると改めて感じる日々です。

私がジュニア大使としてマレーシアで過ごしたのは、たった9日間という短い時間でした。けれども、その9日間が私の人生を大きく動かしています。色褪せることなく、いつも私の背中を押してくれます。同じように、日本に来ている留学生にとっても、日本での一瞬一瞬が人生を動かすかけがえの

なものになるかもしれないと考えます。日本に来てよかったと思ってもらえるよう、工夫して授業をすることが今の私の目標です。



オランダの建築様式・マラッカ・キリスト教会前で

ジュニア大使に参加できたこと、そしてジュニア大使の活動にご尽力して下さる多くの方々がいることに、30年経った今でも心から感謝しています。国際交流とは、日常からかけ離れたところにあるものではなく、日常の一瞬一瞬の中にあるということをジュニア大使の経験を通して学べたことは、私にとって大きな財産となっています。

「ジュニア大使友情使節団」は民間レベルの国際交流活動を促進し、世界の平和に貢献することを目的に小・中・高校生を海外に派遣する事業です。派遣先国・地域の政府や公的団体の後援の下、1985年に開始し、これまで3,762名のジュニア大使が誕生し、帰国後も「ジュニア大使クラブ」等を通して、国際交流活動が広がっています。問い合わせ先: junior-ambassadors@ifajapan.org  
03-3582-3021 ジュニア大使係



# the COMMUNICATOR 6

心と心、世界と日本を結ぶ\*コミュニケーター

月号

## 私と国際交流・インタビュー

# 世界が私の職場

世界銀行本部（ワシントンD.C.）ガバナンス・コンサルタント

しながわ なつの  
品川 夏乃

今、パキスタン北部の町に来ている。シルクロードの真ん中。風光明媚なフンザという地域。仕事が全てオンラインとなり、世界のどこにいても変わらないので、春は桜とあみずの花が咲き乱れとても綺麗とパキスタン人の友人から聞いて、いつか行ってみたいと思っていた。オックスフォード大学院の友人の親戚宅にお世話になっている。遠くに雪山が見えて木々には花が満開、本当に素敵な地。仕事は公共政策のアドバイスをする。今は東ヨーロッパのある国の構造改革のお手伝いをしている。大学院の先輩である上司や世界に散らばっている理解のある同僚と連絡を取り合いながら仕事をする。

## ●ジュニア大使から始まる

両親は特別支援学校の教諭。その両親も弟二人も未だに海外に出たことがない。家族の世界への興味を私が全部もっているようだ。両親からは自分の力でできることであれば何でもやりなさいと言われてきた。

中学2年生のときに、栃木県大平町が「ジュニア大使友誼使節団」に中学生を派遣すると先生から聞き応募し、受かった。初めての海外、それもアラバマ州知事や在アトランタ日本国総領事など、偉い方々とお会いする機会もあり、全く違う世界があることを知った。そのときは英語をうまく話せなかったの、高校では英語を話せるようになりたいと思い、帰国後、両親と一緒に東京にあるインターナショナルスクールを見学に行った。生徒が皆、のびのびしていて2年次から英国や米国などに留学できる。ぜひ、行きたいと思ったが、家に帰り両親から学費が高すぎると言われ、家庭の通帳まで見せられた。これは無理だと納得した。

そこで諦めず、「英語を話して海外で働く」という最終目標を実現させるため、現実的な道を模索した。学費を免除してもらい、英語教育に力を入れている私立高校に入学した。1年間の交換留学制度があり、オーストラリアの公立高校で学ぶことができた。

オーストラリアでは、最初は英語が

分からず付いていくのが大変だったが、周りの皆が助けてくれた。よく言われるが、日本人は数学はできる。いつの間にかクラスで一番できる子になっていた。今でも仲良くしている友達もできた。父親がギリシャ系の移民で母親がアボリジニのカチヤノフ家でホームステイした。それ以来、今に至るまで、色々な国出身の友人との出会いに恵まれて今がある。



1987年、栃木県生まれ。世界銀行コンサルタント。2010年、早稲田大学国際教養学部卒業後、在セネガル日本国大使館外部委嘱員として勤務。その後、国際開発に特化した経営コンサルティング会社であるダルバーク（Dalberg）他に勤め、国連機関での人道支援に従事するなどする。20年、世界銀行と日本政府の奨学生としてオックスフォード大学公共政策修士号取得後、現職。日・英・仏語で仕事をし、ポルトガル語とスワヒリ語も話す。

## ●アフリカにのめり込む

大学進学では、かねてから高い関心を持っていたアフリカへの留学制度がある早稲田大学を受験。米国と豪州での経験を生かし、AO入試で合格。2年次にはウガンダのマケレレ大学への留学が叶った。その手続は、これまでの経験では想像もできないことばかりだった。電話はつながらない、Emailの返事も来ない。それなら現地に行ってから手続きをとると思い渡航。大学の寮には入ったが、授業の登録はままならない。毎日イライラするものの、すぐに友達にはできた。後に友達に聞いたら、当初、なぜこの日本人はびりびりしているのかと思っていたそうだ。

世界の多くの国では物事が計画通り進まないのが当たり前だと学んだ。

大学の授業は物足りなかった。先生が言ったことを生徒がそのままノートに書くという形式。時間を無駄にしていると感じた。ストライキが原因で大学の授業がなくなったので、アフリカ縦断の旅に出た。そこで気づいたのは日本国パスポートの有り難さ。ケニア人のクラスメートは南アフリカのビザがなかなかもらえないなど、かなりの制限がある一方、私は行きたい国はどこへでも入国できた。一人旅ながら行く先々で新たな友だちもできた。

## ●世界の仲間と仕事する

アフリカ縦断の旅で13ヵ国を回り、この地で仕事するには英語だけではなく、仏語が必要と実感したため、留学後に早稲田大学を休学し、コートジボワールにあるカメルーン系企業のインターンの経験もした。その間、パリの本社にも行くことができた。パリでは友人の実家にお世話になった。大学卒業後の就職はアフリカでと思い探したところ、在セネガル日本国大使館で「草の根・人間の安全保障無償資金協力」の仕事を得ることができた。2年の勤務後、セネガルに支社を持つ世界的な戦略コンサルティング会社に就職。そうした経験がオックスフォード大学修士号へと繋がった。世界中から集まった優秀なクラスメートとは素晴らしい友情を築いた。

様々な年齢層の仲間もいる。大学在学中に、ドイツで行われたユニセフのジュニア世界サミットにファシリテーター（会議進行役）として参加した。世界中から志の高い中高校生らが集まったが、彼らは現在、様々な分野で活躍している。エチオピアから来たサルワは看護師になり、コロナ禍の最前線で奮闘している。タンザニアのイサヤは苦労の連続の末、アフリカ中で有名な若手起業家となった。悩んだときにまず相談するのは73歳の親友である。

今後は、仕事と私生活を通し、幸せで責任感のある次世代の地球市民の育成に携われたらと思う。





## ジュニア大使の思い出と現在

いま  
かこ りえ くほい  
金子 理恵 (旧姓 久保井)  
第5回ジュニア大使友情使節団  
イギリス語学研修とオランダへの旅

1989年8月、横山総三先生率いるイギリス・オランダ班の約10日間の研修に参加しました。当時、高校2年生の私が研修を通して感じ取ったこと、またそれが私の人生にどのように影響したかを、特に現在の中・高生の方々にお伝えできたら嬉しく思います。

高校時代、私の周りには文武両道で何でもそつなくこなす友人が沢山おり、その中で自分に自信がもてるものを見い出せず、日々の生活に閉塞感を感じていました。ある日、母が新聞記事で、「ジュニア大使募集」を見つけ幸い参加することとなりました。海外に出るのは初めてで、特に西洋の国ということもあり、文化の違いを経験することはとても楽しく新鮮でした。目に入るカラフルな色彩感覚、目が合うと他人でも微笑み合い、サマータイムの経験や食事の違い等々数えきれないほどの

ことに驚きの連続でした。

イギリスではシェフィールド大学の寮で生活し、キャンパスの広大さや伝統を感じさせる趣きのある建物、またベッドなどのリネンに使われている可愛いファブリック(布)など、新鮮な驚きを心がぐんぐんと吸収していききました。大きな発見といえば、自分自身がアジア人であり日本人であるということでした。日本を自分の国として見つめ直し、同時に、いかに自分の国を知らないか気づく機会となりました。



シェフィールド大学にて  
前右から3番目

オランダでは実物の風車や運河のとても美しい風景に感動し、ホームステイではセントラルヒーティングの家やオランダ人の背の高さにも驚きました。まだ多感な高校生ですから、大人のように色々細かいことを気にすることもなく、たとえば言葉が拙くとも臆せず様々なことに挑戦できるのです。

帰国後、友人からかけられた「なんかも明るくなったね」という言葉を今でも鮮明に覚えています。閉塞感のある生活の殻をジュニア大使の海外研修を

通して打ち破ったと感じた瞬間でした。

その後、短大を卒業した後に米国テンプル大学に編入し、外資系企業で働く機会を得ました。途中、オーストラリアの小学校で約1年間、日本の文化を紹介するプログラムにも参加しました。海外で生活するということは、マイノリティー(少数者)として生きる大変な面や時に人種差別を経験することもあります。しかも、様々な経験を通し人間の根底にある人々を思いやる気持ちは一緒だと感じるに至りました。

現在は育児に専念する生活を送っています。子供たちが少し大きくなりましたので、好きな英語を活かしてまた何かをしたいという気持ちが湧いてきました。先日、英検を中学以来久しぶりに受験し、準1級を取得しました。1級を取得まで挑戦です。英語に対する思いや異文化に対する興味は増すばかりで色あせることはないようです。

将来、娘たちがジュニア大使に参加したいと思う日が来ることを楽しみにするとともに、将来を担う若者たちのためにジュニア大使の益々のご発展をお祈りしております。

「ジュニア大使友情使節団」は、民間レベルでの国際交流活動を促進し、世界の平和に貢献することを目的に小・中・高校生を海外に派遣する事業です。派遣先国・地域の政府や公的団体の後援の下、1985年に開始し、これまで3,762名のジュニア大使が誕生しました。問い合わせ先：  
junior-ambassadors@ifa-japan.org  
ジュニア大使係 電話 03-3582-3021



## ジュニア大使の思い出と現在

いま  
こまつ りょう  
小松 瞭  
新潟市立新津第三小学校6年  
第35回ジュニア大使友情使節団・ブルネイ班

今年の春にパラオにジュニア大使で行く予定にしていたが、外出自粛で中止になってしまいました。学校は春休みが長くなりましたが、5月から徐々に再開し、マスクをつけて通っています。宿題が多く大変です。

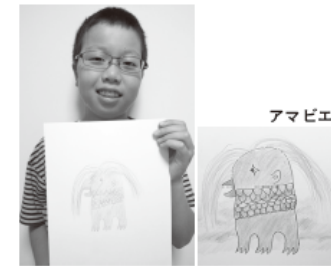
僕が、ジュニア大使に興味をもったきっかけは、昨年、お父さんが新聞でジュニア大使ブルネイ班募集の記事を見つけてくれたからです。僕の友だちは飛行機で韓国へ行ったり、シンガポールへ行ったり話を聞かせてくれていましたが、僕は海外どころか飛行機に乗ったこともありませんでした。思い切って参加した2019年3月のジュニア大使ブルネイ班の経験は、僕にとり人生の大きな一歩になりました。それまで僕は「ブルネイ」という国を見たことも聞いたこともなかったので、どんな国か図書館で本を探して読んで

みました。ブルネイはボルネオ島という大きな島の一部で、王国であり、野生のテングザルがマングローブ林に住んでいることや、水上集落があることが書かれていました。

実際にブルネイを訪問し、それらを体験できました。テングザルがマングローブ林にいるところも見られたうえに、道路にいるところも見ることができました。水上集落も見ることができました。読んだのと実際に見たり接したりするのは大きく違いますが、読んでいないと気づかないポイントもあったので準備もやはり大切だと思いました。僕は、ジュニア大使に参加することにより、「準備」して「体験」すると、より外国のことが分かり、楽しめることが分かりました。

パラオについても図書館で本を探して読んでみました。パラオはブルネイと違い、大きい島の中にあるのではなく小さい島が集まってできた国です。パラオもブルネイのように熱帯の国で珊瑚礁や熱帯魚が泳いでいる海がある国ですが、本で読んでみると興味がわきます。でも本で行って見て地元の人と話してみたかったなあと思っています。今回行けなくなったことはとても残念ですが、この間に学校の勉強やラグビーなど海外に行かなくてもできることをがんばり、また機会があれば国際交流に参加してみたいと思います。また、外国に行くに英語も必要ですし、ブルネイであればマレー語も使われていました。少しでも言葉を覚えられ

ばもっと楽しめると思うので、外国語の勉強もしてみようと思っています。



アマビエ

最後に僕が書き写した、コロナ対策の一つ、妖怪「アマビエ」を紹介します。「アマビエ」は、海に現れ、疫病が発生したときにその姿を書き写すと疫病が治まるとされている妖怪です。迷信かもしれませんが、苦しいときには心の余裕も必要かと思います。世界各地でコロナウイルス感染対策に多くの人たちが頑張ってくれていますが、僕たちも健康に気をつけて、コロナウイルスがおさまったら国際交流できるといいなと願っています。

「ジュニア大使友情使節団」は、民間レベルでの国際交流活動を促進し、世界の平和に貢献することを目的に小・中・高校生を海外に派遣する事業です。派遣先国・地域の政府や公的団体の後援の下、1985年に開始し、これまで3,762名のジュニア大使が誕生しました。問い合わせ先：  
junior-ambassadors@ifa-japan.org  
ジュニア大使係 電話 03-3582-3021





いま  
ジュニア大使の思い出と現在



くさば りょう  
草場 亮  
外資系企業勤務  
第15回  
ジュニア大使友情使節団  
オランダ班  
参加時：高校2年生

2000年3月末から4月の10日間のジュニア大使の経験は、20年経った今、自分を形成する一部に間違いなく感じています。私にとって初めての海外で、「世界の大きさ」を肌で感じた10日間でした。

オランダという国を学ぶために、司馬遼太郎の『オランダ紀行』を事前に読みました。そこには、灌漑を行い国土を作ったため山がなく、チューリップ畑や風車が有名で、国民の身長は高く、生のイワシを食べる、といったことが書かれていました。ジュニア大使としてオランダを訪問し、そのすべてを実際に体験することができました。山がないため空がとても広く、チュー

リップ畑や風車が映えて見えました。ホームステイ先のお父さんは身長2mを超えており、一緒に生のイワシに玉ねぎを付けて食べました。生のイワシが好きなのはお父さんだけでしたが、今、思い返すと先に本を読んでいたというのは大きく、1週間ほどという短い滞在を有意義なものにすることができました。

ホームステイでは、両親と兄弟2人がいる家庭にジュニア大使2名でお世話になりました。バスでホームステイ先に向かう際の日本とは違う緑のグラウンドや、ほぼ毎食同じメニューだったパンとチーズとハムの食事、自転車で案内してもらった街、近所の友人たちと一緒にサッカーをしたこと、フェスタと呼ばれる日本の縁日のようなお祭りに行ったこと、とてつもなく大きいパンケーキを食べに連れて行ってもらったことなど、意外と覚えていて、全ていい思い出です。

ホームステイ先の家族と過ごした時間、アネネの家や強制収容所を訪問したときに感じた緊張感、オランダの街の雰囲気といった具体的に表現しにくい思い出ばかりですが、高2という多感なときに海外に行き、生活、文化、人と触れ合う経験ができたということは非常に良かったと思います。大学生や大人になってからでも海外に行くことはできますが、それには何かしら目的があると思います。「ただ」経験するということ、10代のころにできて良かったと今さらながら感じている

ます。

今、私は外資系企業にてプロジェクトマネージャーをしており、様々な人と仕事をする機会があります。このような環境で仕事をするようになることは高校時代は思ってもいませんでしたが、ジュニア大使で「世界の大きさ」を知ったことが今の自分に大きく影響していることを日々感じます。

追補ですが、大学卒業時にオランダをひとりで再訪問し、当時お世話になった現地のコーディネーター、ロビンの家に2泊させてもらいました。一番好きな国はどこかと聞かれたらオランダと答えます。自分の心にオランダが刻まれていて、また機会があればオランダに行ってみたくと思っています。

「ジュニア大使友情使節団」は民間レベルでの国際交流活動を促進し、世界の平和に貢献することを目的に小・中・高校生を海外に派遣する事業です。派遣先国・地域の政府や公的団体の後援の下、1985年に開始し、これまで3,762名のジュニア大使が誕生し、帰国後も「ジュニア大使クラブ」等を通して、国際交流活動が広がっています。IFAでは環境と平和、交流をテーマに来春実施する「ジュニア大使パラオ班」の募集を11月に予定しています。

問い合わせ先：  
junior-ambassadors@ifajapan.org  
☎03-3582-3021 ジュニア大使係



いま  
ジュニア大使の思い出と現在



よしだ まさひろ  
小竹 正祥  
日本IBM株式会社勤務  
第12回夏期  
ジュニア大使友情使節団  
米国アラバマ班  
第1グループ参加

1996年に中学2年生で参加した当時は、アトランタ・オリンピックが開催されていました。来年の東京オリンピックで7大会分も時間が経過したことになりますが、光栄なことに私の所属したグループは今も交流が続いており、数年ぶりの同窓会を先月行いました。中学生という多感な時期にアメリカで2週間の経験を共有した仲間との絆は私の財産であり、団を組織・主催された IFA や茨城県・ちちなかな市役所の皆様、参加させてくれた両親に心から感謝します。

この執筆では思い出と現在（いま）について3つにまとめてみました。

●現在の仕事へのきっかけ

私は外資系企業にて航空会社向けのシステム・コンサルタントを担当しています。

航空会社に携わる仕事に魅力を感じたきっかけは、ジュニア大使で初めて飛行機に乗った際に出会ったアメリカ人の客室乗務員たちです。日本では同僚同士がお客様の前で会話を楽しむといった光景を見たことがなかったので、彼女たちが接客をしながら談笑し合うことに驚きつつ、その大らかな雰囲気に居心地の良さを感じました。またこれから始まるチャレンジに期待が膨らんだ瞬間でもあり、緊張を解してくれた航空会社を強く意識するようになりました。

●印象深い思い出

アラバマ州でのホームステイ初日、屋外のジャグジー（プール）を浴槽だと勘違いして入ろうとし、ホストファミリーに慌てて止められました。恥ずかしい思いをした私に、ホストマザーが「日本人はフロが好きね」とフォローしてくれた一言にとても救われました。その後、ジェスチャーやジュニア大使英語テキストなどを使いながら、交流することができ、その喜びは今でも残っています。海外出張で世界を飛び回っていた父に、流暢な英語よりも会話する相手の文化を理解することが大切だと言われたことを思い出し、正に納得した場面でした。

●仕事におけるポリシー

今はインドや中国のメンバーと最新技術を活用した新たな航空サービスを提供しています。心がけていることは互いを尊重し合うことです。困難なプロジェクトにおいても日本から一方的な要求はせず、One Teamとして共にアイデアを出して前向きに作業を進め、ベストを尽くしています。機内で見た客室乗務員たちの光景や、文化の理解への実体験が私のポリシーの礎になっていると言えるでしょう。

今後の夢は5歳と0歳の息子たちにもジュニア大使を経験させ、思い出を語り合うことです。

「ジュニア大使友情使節団」は民間レベルでの国際交流活動を促進し、世界の平和に貢献することを目的に小・中・高校生を海外に派遣する事業です。派遣先国・地域の政府や公的団体の後援の下、1985年に開始し、これまで3762名のジュニア大使が誕生し、帰国後も「ジュニア大使クラブ」等とおして、国際交流活動が広がっています。

IFAでは環境と平和、交流をテーマに来春実施する「ジュニア大使パラオ班」の参加者を募集しています。問合せは下記まで。

junior-ambassadors@ifajapan.org  
☎03-3582-3021 ジュニア大使係



# the COMMUNICATOR 5

心と心、世界と日本を結ぶ\*コミュニケーター

月号

## 私と国際交流・インタビュー

# たどり着いた仕事、国際医療搬送

ふくおか あみ  
インターナショナルヘルスケアクリニック 看護師 福岡 愛巳

小学4年生の春休み、子供対象のカナダ2週間スキー旅行に一人で参加した。父母の勧めで低学年の頃から長期休みには国内キャンプへ参加していたが、海外は初めてだった。中学生や高校生が多く最年少だった。最初は行きたくなかったし、もちろん英語は話せないし、両親に言われて無理矢理という思いが強かった。父は出発前に、両親には教えることができない何かを得てきて欲しいから、これだけの費用を使うことも分かっているからと自分で参加費用を数えることもあった。この行為で子供心に、親の期待が伝わった。

### ●海外研修に参加した8年

兵庫県・姫路市の田舎町で、両親は障害者の兄と私を厳しく育ててくれた。父は車関係の自営業、母は専業主婦で、二人とも海外には縁のない環境で生きてきた。私には広い世界を見せて視野の広い人になって欲しい、そして私を通して、自分たちの知らない世界を教えて欲しいとの願いが込められていた。次第に、海外に行くことが私自身の楽しみになり、それは大学生になるまで続いた。中学高校ではバスケットボール部に所属していたが、長期休みの度に海外に行くことを、周りの先生や友人は理解してくれ、帰国すれば見てきた多くのことを、校内で発表する機会も度々もらっていた。

中学1年生のときに「ジュニア大使友情使節団・オランダ班」に参加。歴史好きだったので、アンネの家やウエスターボルグ（捕虜収容所）など、印象に残っている。団員とは20年たった今でも連絡を取り合っている。

高校3年生の時、大学受験に際して担任の先生と面談で、外国語大学志望と話した。担任から英語で何がしたいのかと問われ、明確に答えることができなかった。そして立ち止まって考えた時、頭に浮かんだのは、アジアの国々で、現地の人を助けている医療者だった。マレーシアでの植林、インドのマザーハウスでの活動、2003年のイラン地震後の震災ボランティアなどで見た、英語が使える看護師になりたいと

思い、進路を兵庫県立大学看護学部看護学科に変更した。



1986年、兵庫県生まれ。2010年、兵庫県立大学看護学部卒業後、神奈川県・横浜市立大学附属病院のICU（集中治療室）に勤務。13年、フィリピン・セブ島に英語留学後、現地総合病院内のジャパニーズヘルプデスク（JHD）のセブ・エリアマネージャーとして勤務。16年、帰国後、市中病院のICUでの非常勤看護師をしながら、現クリニックで国際医療搬送のエスコート看護師を務める。

### ●看護師と英語

その後大学病院に入職し、ICU（集中治療室）の担当となった。新生児から年配の方まで、様々な疾患を持った患者さんの看護に当たり、本当に大変だったが、何でもできる看護師になりたいという思いもあり、夢中だった。

「患者さんは看護師を選ぶことができない、自分が担当する方に不利益がないように努める」、新人1年目にこのことに直面し、理想と現実を少しでも近づけるために必死だった。

3年が経過し、やっと一人前と認められるようになり、他病院のICUでも働いてみたいと思い、7月からの転職を決めた。その間、骨休みにフィリピン・セブ島の語学学校で英語を勉強することにした。日本人対象の学校で、20から40歳代の数名がそれぞれの思いを抱えて英語を学んでいた。先生はフィリピン人。久々の英語が楽しかった。

折しも現地日本人雑誌の求人記事、「総合病院で日本人患者をサポートしませんか」が目にとまった。英語を学

びながら医療に携われることに魅力を感じて応募し、採用された。

ヘルプデスクでの仕事は多岐にわたり、患者さんの保険や入退院の手続き、通訳や帰国の手伝いに加え、日本領事館との邦人援護の仕事、さらには会社の売上会議にも参画し、新しい病院との契約を開拓するなど、医療はビジネスだと痛感することも多かった。看護師としてだけでなく、マネジメントやマーケティング、外国人との交渉の難しさや医療の違い等、多くのことを学ばせてもらった3年半だった。

### ●国際医療搬送を日本に

病院・ヘルプデスクの立ち上げで、インドにも出向した。フィリピンと比較し、階級社会・男尊女卑が色濃くあり、外国人の女性が一人で働くには相当きつい環境であった。女性だけでは仕事はうまくいかず、男性上司を通じて話が通るように工夫もした。その国や地域、その場での対応、「郷に入るとは郷に従え」を体感した。これらの経験からどんなところでもやっていける自信はついた。

ひよんな繋がりや、タイの病院に入院中の患者さんの、日本への帰国搬送エスコートを頼まれる機会があった。そこで出会った医師が、まだ日本では馴染みのない国際医療搬送に携わるクリニックを立ち上げると聞き、それを手伝えるために2016年に帰国し、市中病院のICUで非常勤看護師をしながら、そのクリニックの仕事始めた。

普段クリニックでは外国人患者さんの診療をしており、英語が必須。また、依頼があれば日本人患者さんを日本に、日本滞在中の外国人患者さんを自国に搬送するエスコートを行う。対象は世界中で、飛行ルートを考え、航空会社、救急車などを状況によりどこが良いかを医師と相談し手配していく。

アジアの場合は最短で次の日に出発もあり、現地滞在が6時間程度ということもある。大変なことも多いが、英語を使い人に役立つ仕事だ。幼いときに海外に出してくれたから今がある。両親には感謝している。





ジュニア大使 2世誕生

みずしろ ゆみえ なかのめ  
水城 弓絵 (旧姓 中目)  
第4回ジュニア大使友情使節団  
米国アラバマ班、マレーシア班参加  
当時小学6年生

小学6年のときにアラバマ班とマレーシア班に参加しました。ジュニア大使の経験は私にとってとても思い出深く、また、大変充実した内容だったと、その後他の海外語学研修にも参加して思いました。私は現在、小児科医となり子育てとの両立のため非常勤勤務で働いています。中学2年、小学6年、小学2年の子供がいますが、私の中に素晴らしい記憶が残っているので、それを子供たちにもと昨年のパラオ班に当時中1と小5の子を参加させました。

私は3人姉妹で、妹2人もジュニア大使に参加しました。真ん中の妹は耳鼻科医になり、バリバリ手術をしています。海外の学会で発表したりと、英語が得意なことが仕事に役立っています。末の妹は歯学部を出て今は専業主婦をしています。

親に3人とも同じように海外に行かせてもらったことに、大変感謝しており、自分も次の世代である私の子供たち全員に同じように素晴らしい経験をさせてあげたいと思っています。

コミュニケーターの記事を拝見し、ジュニア大使の皆さんのその後の素晴らしい活躍に感嘆するとともに、ジュニア大使に参加された方は素敵の方が多かったと改めて思い出しました。きっと多くのジュニア大使経験者が今、さまざまなところで活躍されていることと思います。これからも、ジュニア大使派遣に心から期待しております。

そうだ のりこ かとう  
左右田 紀子 (旧姓 加藤)  
第5回ジュニア大使友情使節団  
オランダ班、マレーシア参加  
当時高校1年生  
第7回シアトル班参加  
当時高校3年生

ジュニア大使が大好きで、3つの班に参加しました。それぞれ特徴があり、とても良い経験でした。帰国後も各地のジュニア大使仲間が集まるのが楽しみでした。結婚し子供ができてからは、必ずこの経験をさせたいと思い、昨年、息子が中1になったので、早速、初のブルネイ班に参加させました。英語が苦手だったのに、帰国後はとても自信がついたのか、父親の赴任先である中国にも一人で会いに行きました。ここからの成長が楽しみです。

さわむら としひろ  
沢村 利洋  
第1回ジュニア大使友情使節団  
米国アラバマ班参加、当時中学2年生

中学2年生のときに参加したアラバマへの旅が、現在の自分の行動原理の原点となっています。現在、高専教員として教育・研究に携わっていますが、国際会議発表や国際交流事業への参画において他国との壁をそれほど感じず自由に動けるのは、ひとえに中学時代のジュニア大使の経験があったからだと思います。そこで、この度、中2の娘にパラオ班への参加を勧めました。ただ、英語がそれほどできなくても通じ合えるという体験から、その後、自分の英語力はそれほど伸びず度胸だけが培われたのは誤算でしたが。

「ジュニア大使友情使節団」は、民間レベルでの国際交流活動を促進し、世界の平和に貢献することを目的に小・中・高校生を海外に派遣する事業です。派遣先国・地域の政府や公的団体の後援の下、1985年に開始し、これまで3,751名のジュニア大使が誕生しました。帰国後も「ジュニア大使クラブ」等をおして、国際交流活動が広がっています。

今春 IFA では環境と平和、交流をテーマに「ジュニア大使」(パラオ班)を実施します。詳細は下記にご連絡ください。

Email:  
junior-ambassadors@ifajapan.org



ジュニア大使の思い出と現在  
いま  
やまべ ともこ  
山部 友子

家業/日本語教師  
第12回ジュニア大使友情使節団  
英国班(当時大学1年)

現在、家業の建設会社で主に経理を担当しながら、愛知県・豊橋市の日本語教室で日本語教師として活動しています。週1回ですが、少しでも学習者の力になれたらと思っています。

ジュニア大使の一員として英国を訪問したのは20年前のことです。高校生と大学生からなる英国班には現地での英語研修があり、そこで出会ったのがアイリッシュ先生でした。先生の「毅然として温かくユーモラス」な人柄に触れたことは、後年、日本語教師を目指すきっかけとなりました。日本語教師養成講座を修了し、いざ、日本語教師の職を得てみると、教えることがいかに難しいことかを思い知らされました。今は家業に力を注いでいますが、教壇に立つときはやはり「毅然と

して温かくユーモラス」を目指します。



20年前の英国を皮切りに、海外旅行に時々出かけるようになりました。家族は私のことを、国民的映画シリーズの主人公になぞらえて「寅ちゃん」と呼びます。寅さんと違って年間340日は家で夕飯を食べてはいますが。

旅の思い出というと、現地で出会った風景・人・食べ物などでしょうか。私の場合は、大切な人に見せたいと思う風景を探ることが旅の原動力の一つです。最も忘れたい風景といえば、ジュニア大使の行程の中に訪れたヨークの城壁を彩る黄色い水仙の花々です。今でもテレビでヨークの城壁が映ると、「春は水仙の花がそれはきれいで…」と思わず口をついて出ます。

映画の寅さんは、ウィーンへ行っても現地のご婦人となんとなく会話が成立します。もちろん寅さんは日本語です。コミュニケーションを成り立たせるのは、言葉の流暢さよりも雑談力と笑顔なのかもしれません。ボランティア

ア日本語教室を初めて訪れる学習者の方は、皆さん緊張した顔で入ってきます。そんなとき、こちらからニコッと笑って挨拶するだけでも、緊張がすっとほぐれるのを感じます。教室では、天気の話もすれば、家族の話もします。語彙や文型は学習に不可欠ですが、それ以上に「日本人の友人」とのおしゃべりを楽しんでほしいと思っています。

「言葉が通じなくても自分を理解しようとしてくれる人がいる」という、私が海外へ旅行するたびに感じる喜びを、学習者の方にも感じていただければ幸いです。

「ジュニア大使友情使節団」は民間レベルでの国際交流活動を促進し、世界の平和に貢献することを目的に小・中・高校生を海外に派遣する事業です。派遣先国・地域の政府や公的団体の後援の下、1985年に開始し、これまで3718名のジュニア大使が誕生し、帰国後も「ジュニア大使クラブ」等をおして、国際交流活動が広がっています。

IFAでは環境と平和、交流をテーマに来春実施する「ジュニア大使パラオ班」の参加者を募集しています。問合せは下記まで。

junior-ambassadors@ifajapan.org  
☎03-3582-3021 ジュニア大使係

# the COMMUNICATOR 9

心と心、世界と日本を結ぶ\*コミュニケーター

月号

## 私と国際交流・インタビュー

# 飛ぶものに興味を抱いて

一般財団法人 宇宙システム開発利用推進機構 研究員 なかむら しんさく 中村 晋作

小さいころから昆虫や鳥、飛行機など、飛ぶものが好きで、自分も飛びたいと思っていました。今、仕事として、地球の周りを「飛ぶ」人工衛星の利用開発に携わっていただけることはとても幸運だと感じています。自分の子どもたちにも、やってみたいと思ったことは臆することなく試して欲しい。願わくば、私もこれからでも宇宙飛行士に挑戦したいと思っています。

### ●母に勧められ海外研修

一般的な家庭に生まれ育ちましたが、比較的、幼いころから国際交流の機会がありました。私の生まれる前、1年間の英国留学経験がある母から、物心つくとき英語を教わっていました。家の隣には岐阜大学があり、インドや中国からの留学生がいました。幼稚園のころだったと思います。同じ年ぐらいの外国人の子どもをスーパーなどで見かけると、母から声を掛けてきなさいと言われ、しぶしぶ英語で出身など聞いて会話していたことを覚えています。

小学校3、4年生のころには、母が中国人留学生の下宿を始めました。2年間、寝食を共にして、休日には山登りに行ったり、川に釣りに行ったりしたのもいい思い出です。小学5年生のときには、新聞で国際研修プログラムを見た母の勧めで、IFAの「ジュニア大使」プログラムに参加し、マレーシアに行きました。マレーシアの多文化に驚くとともに、日本との文化の違いに大きな刺激を受けました。

1996年、中学2年生の夏休みには1ヵ月間、米国サンフランシスコ郊外の母の友人宅にホームステイしました。当時あまり英語が話せた記憶はないのですが、ホスト宅の同世代の子どもたち「tree house (木の上に建てられた小屋)」で寝泊まりしたり、山に登ったりと、とにかく楽しかったです。

高校1年生のころから、心理学にも興味をもつようになりました。当時あまり何事にも身が入らず、もやもやした気持ちでいたのですが、そういう自分の気持ちは一体どこからくるのだろうかという興味をもったのがきっかけです。

心理学であれば米国の大学がいいのではと思い、両親とも相談し、米国留学を決めました。



1982年、岐阜県生まれ。2001年、県内私立高校卒業後、渡米。ダラスバプティスト大学に入学し、心理学と生物学を専攻。04年、テキサス大学に転学。06年同大卒業。帰国後、IT関連会社などの勤務を経て、13年より現職。妻と子2人。

### ●米国大学への留学

2001年5月に渡米しましたが、その年の9月11日に同時多発テロが起きました。当時ホームステイしていた家庭のテレビで、テロのニュースが流れていました。そこから米国が03年のイラク戦争まで進んでいくのを目の当たりにしました。これが戦争をする国なのだという強い衝撃を受けました。ニューヨークに自宅がある友人の話の聞いたとき、当時は、キリスト教系の大学に在籍していたため、学生が体育館に集まり真剣に祈るのを目にしました。学内では勉強会が盛んになり、正義とは何か、ブッシュ大統領がイラク戦争を始めることをどう考えるか、など、白熱した議論を通して、正義や平和、宗教観について考えさせられました。

01年12月には、少し怖い思いをしました。休暇を利用してアリゾナの友人宅に向かうときのことです。飛行機での移動のため、空港の保安検査場でゲートをくぐって、航空チケットを係員に示そうと、胸ポケットを探しましたが、あるはずのチケットがありません。落とされたかもしれないと思い、その場の係員には了解を得て、元の場所の方に戻って行きました。すると、逆

走る私を不審に思ったのでしょうか。あっという間に大勢の銃を構えた保安官たちに取り囲まれてしまいました。もうこれで米国から強制退去かと思いました。結局、チケットは別のポケットに入っており、無事飛行機に乗ることができたのですが、テロ後の米国内の緊張度を体感した出来事でした。

04年には、より科学的に心理学、生物学を学びたいと思い、同じテキサス州の総合大学に転学しました。統計学を使った心理学のクラスでは、現地の病院にインターンとして行き、現地の子どもたちに心理学テストなどを実施したり、卒論では生物学分野で食物連鎖による水銀汚染について書きました。どれも貴重な経験となりました。

### ●人生、色々繋がっている

大学卒業後、06年に帰国しました。米国での卒業時期と日本の就職時期がうまく合わなかったこともあり、一旦、地元の岐阜に戻り、半年ほど塾で英語講師をし、その後3ヵ月間はリュックサック1つの旅、バックパッカーで1人欧州を旅しました。07年に東京に出てIT企業に就職。しばらくして、社長から「中村君は英語使えるだろう」と言われ、現在の団体の前身へ出向となり、13年からは所属が出向元から現財団となり今に至ります。

当初、人工衛星の地上設備の運用管理、開発を担当し、各国宇宙機関との協力に従事しました。今年度からは、国際協力の部署に配属されました。第一弾として、ペルーアマゾンでの金の違法採掘による森林伐採を監視するため、人工衛星データによる環境モニタリング手法や現場検証方法の研修を現地で行いました。この国際協力を通じて、しばらくの間離れていた生物学や、金の精製過程で使う水銀のことを今一度考えることにもなっています。人生色々なものが繋がっているものだとつくづく感じています。

幼いころ空を飛ぶことに興味をもっていたと思い出し、いろいろな国の人と働きながら、その思いに一步、近づいた気がしています。





いま  
ジュニア大使の思い出と現在  
須能 玲奈

Ernst & Young ニューヨーク事務所

第11回ジュニア大使友情使節団  
イギリス班参加、当時高校1年生

1996年、高校1年の春休みにジュニア大使イギリス班に参加しました。今でも色鮮やかに蘇ってくるイギリスでの刺激的な2週間ですが、こうして振り返ってみるともう20年の月日が経っていることに、改めて時の流れを実感しています。私は幼いころから英語や海外での暮らしに興味をもち、英語教室に通ったり、ラジオの英語講座を聞いたりしていましたが、ジュニア大使イギリス班で過ごした日々は、私が初めて海外の地で「生きた」英語に触れた体験でした。

出発前、東京での事前研修では、イギリスという国についてだけでなく、英語は海外の人とのコミュニケーション手段であるけれども、その大前提として、まず心と心が通じ合うことの大

切さを学びました。現地でのホームステイ最終日に、ホストファミリーの小さな娘と“Til miss you.”“Til miss you, too.”と言葉を交わしたときに、ジュニア大使の手引で習った英語表現を実践で活かしたことに、心が通じた会話ができたと嬉しく思い、生きた英語学習の楽しさを実感しました。



その後13年、2009年の夏、私は単身でニューヨークに渡り、大学時代から憧れ続けたニューヨークでの生活も6年目に入りました。初めての海外での長期の生活は、言葉が思ったように通じないということ以上に、日本とは違う不便な暮らしや日本の常識が通じないという日常に、毎日が困難の連続でした。しかし、渡米当初通った語学学校では、カザフスタンやコロンビア、中国、韓国の生徒たちと机を並べ、発言重視のアメリカ式教育の下、各国の事情を議論したり、授業の枠を超えて仲良くなったり、日本では得られない体験に胸躍りました。

学校を終えるとアメリカの監査法人に就職する機会を得ることができ、部署で日本人は私だけ。日本人は毎日お

寿司を食べていると思っているほど日本のことを知らないアメリカ人と英語漬けの環境で2年ほど仕事をしました。その中で、日本でははっきり物を言うと思われているアメリカ人にも実は本音と建前があって、意外とほかした言い方しかしないことや、ビジネスの場でのアメリカ流交渉の仕方を間近で見ることができたのは、貴重な体験です。

現在は、監査法人の日系企業部署で、アメリカで事業を行っている日系企業の会計監査業務に従事しています。また、海外の生活では日本にいたとき以上に自国のことを知りたいという思いが強まり、日本文化を紹介するためにニューヨークで創設されたNPOで、設立当初からボランティアで記者を務めています。人種のつぼと言われるニューヨークの街で、宗教や価値観の異なる世界各国の人たちの生き方を垣間見ることができるのは、ニューヨーク生活に慣れた今でも新鮮です。

この記事を書きながら、私の海外生活の原点に遡り、現地の人との交流を通じて海外生活の楽しさや生きた英語の面白さを教えてくれたジュニア大使の日々を懐かしく思い出しています。

「ジュニア大使友情使節団」

国内外の公的機関の後援を得て1985年に始まった事業。これまでのジュニア大使の参加者数は3,718名。IFAでは今夏、8月、米国・ロサンゼルス班を組織します。



いま  
ジュニア大使の思い出と現在  
佐野 展子



さの のりこ  
佐野 展子  
第5回  
ジュニア大使友情使節団  
アラバマ班参加  
当時中学1年生

現在、少しの間お休みしていますが、私の職業は日本語教師です。大学で日本語教育を専攻し、その後もずっとこの世界にいます。日本語教師のお仕事は、ひとことでは「外国の方に日本語を教えること」ですが、その対象は国内だと日本語学校の学生や高校・大学の留学生、ビジネスマン、主婦、日本の公立校・インターナショナルスクールに通う生徒など、海外だと小・中・高校生、大学生、来日準備のために学習する研修生など多岐に渡ります。私は、その中でも子どもたちの日本語指導に一番長く関わってきました。

このような私の原点はジュニア大使への参加だったのだ、と振り返る機会

がある度にしみじみ思います。中学1年生の夏に初めて訪れた外国、そこで初めてのホームステイなどの体験そして思春期真っ只中の私に与えてくれた刺激がこれほど大きなものになるとは、当時は予想だにしませんでした。

英語がほとんど話せなかった私を温かく迎えてくださったアラバマのホストファミリーのことは、今でも忘れていません。そして、この時期に勇気をもって私を海外に送り出してくれた両親にも感謝しています。ジュニア大使への参加は、私に国際交流につながる活動への扉を大きく開いてくれました。

高校生のとき、ジュニア大使クラブ合宿の企画を手伝わせていただいたことがあります。この企画でインドシナ難民の子どもたちと初めて出会うことになり、彼らの住んでいるセンター(定住促進センター)も案内していただいたと記憶しています。このときに子どもたちが抱える問題などについてお話を伺ったことが私の大学での専攻や卒業論文のテーマ、職業を決定する際に大きく影響したと思われます。大学卒業後は、2年ほど日本語指導助手としてアメリカ・ボルチモアにある私立の一貫校で小・中・高校生への日本語指導に携わりました。帰国後は、日本語教育団体に所属したのですが、そこで再びインドシナ難民の子どもたちに会うことができました。

以前訪れたセンターで、今度は子どもたちに日本語を教えることになった

のです。今ではそのセンターもなくなり、時の流れを感じますが、私が日本語教師を目指すきっかけの一つとなった場所に縁あって帰ってこられたことは感慨深かったです。

外国にルーツをもつ子どもたちが日本の学校で学ぶ際のサポートをすること、これからもこれをライフワークとしていきたいと考えています。

今は、幼稚園にあがったばかりの息子に日本語を教えることを優先していますが、少しずつ仕事を復帰していくつもりです。また、これまで私が海外で受け取った優しさの恩返しも兼ねていずればホストファミリーなどとして草の根交流をしたいと願っています。

「ジュニア大使友情使節団」は民間レベルでの国際交流活動を促進し、世界の平和に貢献することを目的に小・中・高校生を海外に派遣する事業です。派遣先国・地域の政府や公的団体の後援の下、1985年に開始し、これまで3718名のジュニア大使が誕生し、帰国後も「ジュニア大使クラブ」等をとおして、国際交流活動が広がっています。

現在、IFAでは環境と平和、交流をテーマに「ジュニア大使友情使節団・パラオ班」参加者を募集しています。問合せは下記まで。

junior-ambassadors@ifa-japan.org





**ジュニア大使30周年記念合同同窓会**  
～ジュニア大使クラブ主催～

ジュニア大使友情使節団は1985年の米国アラバマ班に始まり、米国ではテキサス、ヴァージニア、オクラホマ、シアトルに、国はマレーシア、オランダ、英国、中国、カナダ、ニュージーランド、パラオと広がり、一般公募と自治体派遣の参加者が全国にいます。

大村 和民 日通旅行、元旅行事業部長

ジュニア大使友情使節団の開始時から携わってきた者として、「よくぞ30も続いているな」というのが率直な感想です。その要因を私なりにたどってみると、やはり①創始者が掲げた使節団の目的が明確であったこと、②事務局の使節団に対する情熱が未だに衰えていないこと、この二つに尽きると思えます。この30年間に、若い時代に広い世界を見た約4,000人近くのジュニア大使が活躍できる時代は既に来て

おりますし、今後ますますその力が日本には必要となってきます。若い時代に戦争を体験した創始者横山総三氏は、世界平和のために自らができること、即ちジュニア大使事業に全身全霊を傾け、日本の若い力が進むべき道の本を示したと言えます。この事業が絶えることなく細く、永く続くことを心より願います。

「静かに行くものは健やかに行く。健やかに行くものは遠くまでゆく」  
(イタリアの諺)



石橋 由香 第1回アラバマ班参加

第1回に北海道から参加した旧姓、羽田由香です。30周年合同同窓会では貴重な機会を与您にいただきありがとうございます。第1回のアラバマ班は、シアトルの大学寮に泊まったり東海岸への移動もあり、思い入れの熱い企画が盛りだくさんで、知らずに楽しく過ごしたジュニア大使たち。でもその裏では、たくさんのご苦労があったと知り、今になって感謝でいっぱいです。ジュニア大使に参加した方々が多方

面で活躍されており、この同窓会でエネルギーをたくさんいただきました。私のこれからについて考える良いキッカケになりそうです。

◇  
日 時：2014年11月2日(日)  
13:30～16:00  
場 所：国立オリンピック記念青少年総合センター

- 参加者：引率者、ジュニア大使 50名  
次 第：  
13:30-13:35 開会  
13:40-14:00 創始者、横山総三先生を偲ぶビデオ上映  
14:00-14:10 引率者、関係者紹介  
14:20 乾杯 引率者代表  
上條 雅子 神奈川大学名誉教授  
14:45-15:00 参加者近況発表  
小林 実樹 (第28回パラオ班、小学5年)  
宮谷 敬子 (武蔵野市ジュニア大使、1988年、主婦・会社員/家業)  
滝吉 優子 (第7回シアトル班、医師・リハビリテーション科)  
中村 晋作 (第9回マレーシア班、宇宙システム開発利用推進機構勤務)  
宮本 荘岳 (第9回マレーシア班、第11回オランダ班、外務省勤務)  
15:10-15:20 ウルトラクイズ  
各班の訪問先資料より出題  
15:45-15:50 IFA からのお願い  
15:50-16:00 参加者近況発表  
16:00 閉会



**ジュニア大使の思い出と現在**

井上 剛  
歯科医師

第3回武蔵野市ジュニア大使  
当時中学1年生

現在私は東京医科歯科大学大学院で、教育・研究及び臨床に携わっています。大学院大学として多くの大学院生を有しており、中でもアジアを中心に各国からの留学生の割合が年々増加している状況です。そのため日々のコミュニケーションや研究の指導、大学院の講義なども英語が共通言語となっています。

私が第3回ジュニア大使としてアメリカ・テキサスに滞在させていただいたことが、その後の生活に大きな影響を与えたことは間違いありません。当時、私は一行の中でも1番小さく、元々活発でなかった性格でしたが、わずかに2週間という海外経験が自分を大きくし、色々な物事に対する挑戦的な感覚を、良くも(悪くも!?)もたせてく

れました。そのときに得た感性が現在携わっている仕事にも活かされており、まだまだ英語が堪能というレベルではないものの、意思疎通を図るうえで話せることのみでなく、相手の状況を考える(想像する)ことができるということの礎となっています。



ちょうど、アメリカで初めての黒人大統領が誕生した2009年、私は演説のあったワシントンD.C.の真北に位置する、メリーランド州に1年間留学していました。激動ともいえるその当時のアメリカの興奮した状態は、研究所においても感じる事ができました。演説を聞くために100万人以上の人が集まり、歓声をあげていた様子は今でも鮮明に思い出されます。旅行や出張で海外に少し行くことがあっても、なかなかその土地での生活や人間関係などは感じることはありません。実際に住む、滞在することで得られる情報は常に生々しく、自分がこれまで日本の生活で得てきた常識の範疇を平気で凌駕していきます。オバマ大統領が誕

生したそのときの感覚も、日本にいてテレビを通して感じることは遙かに差があったのではないかと思います。

私の本業は歯科医師であり、多くの患者を大学病院という特殊な環境で診ています。通常「歯医者に行く」とは、近所の歯医者に診てもらおう方がほとんどだと思います。しかしながら、中にはこころや体に病気を抱えていることが原因で、いわゆる開業医で治療を受けられない人がいます。そんな人が受診するのが大学病院です。様々な事情を抱えている方がほとんどですから、そういう患者さんの言葉や背景をいかに捉え考えるかが治療を進める上で重要な鍵となっています。

武蔵野市ジュニア大使に参加して、人との関わり方を学び、その後の様々な経験につながっていることに感謝したいと思います。

**「武蔵野市ジュニア大使」**

ジュニア大使事業は、多感な子どもたちが、外国語や異なる文化への関心を軸に「真の国際交流とは何か」を理解し、「正しい国際感覚」を身に付け、「世界的視野」に立てる人材に育てて欲しいとの願いから国内外の公的機関の後援を得て1985年に始まった。

「武蔵野市ジュニア大使」はその翌年、86年から99年まで、東京都武蔵野市からの依頼により組織し、米国テキサス州ラボック市に派遣。





## ジュニア大使の思い出と現在

いま  
あいかわ まきよ  
相河 昌代

アロマセラピスト

第8回ジュニア大使友情使節団  
オランダ班参加、当時中学1年生

オランダの旅から20年。実家から当時の日程表を送ってもらい、昨年、チューリップの咲くオランダの街を再訪しました。ホームステイ先を思い出して、日本国大使館の前で写真を撮り、アンネフランクの家を訪ね……。今ではビール片手に自分の足で行きたい所へ移動、当時を振り返り、懐かしさと「成長したなあ」と幸せ感を抱く時間でもありました。

20年前の私は四国の海や山に囲まれた地で日々走り回り、一歩も外の世界に出たことのない中学生。はじめての東京、はじめての海外。不安に包まれた自分の姿を今でも思い出します。東京まで付き添ってくれた父に「帰りたい」と泣きついたほどの気持ちの小

さい人間でした。外務省表敬訪問では、周囲の団員たちは別世界の人のように見え、事前研修で「一人一度は挨拶をすること」と、と団長先生に言われたときの心臓の鼓動は、もう大変でした。

そんな私がオランダの旅から帰国するときには人が変わったようになっていました。全国から集まった仲間たちからたくさんの刺激を受け、日本国大使館で大使に質問をする、という任務も無事完了。



あのオランダの旅が私に残したものはそれはそれまでの自分の小ささを認識させ、自分は何かやりたいのかが明確になり、人前で発表することに積極的な性格になりました。当時中学生でしたが、行きたい大学が決まり、それに向かって勉強する楽しさもわき、将来像を描くこともできました。

26歳の夏、南仏に一人旅をした私は代替医療に興味をもち、帰国後メディカルアロマセラピーを勉強、現在はセラピストとして働いています。日本では「リラクセス」という認識のアロマ(芳香療法)ですが、フランスでは保険が適用され、代替医療の現場には欠

かせないものとなっています。

香りを嗅ぐと数秒で大脳に伝わり、神経系やホルモン系、免疫系に影響を与えるアロマ。本質的には植物そのものが持つ生命力で、人間のからだを改善していく自然療法です。田舎育ちで自然を身近に感じ、最初に行った海外が緑あふれる風車とチューリップの街オランダ。大地と人間を結ぶアロマセラピーを仕事にした私は東京という大都会で生活する中、故郷の香川や第二の故郷オランダに結びつきがあるのも、恩返しにできなかったのかもしれない。

今は妻となり、母となり、親としてオランダの旅を振り返ることもあります。あの時、中学生の私を笑顔で送り出してくれた両親に心から感謝の気持ちで一杯です。あのタイミングでオランダ班に参加できたこと、今も一生の宝物です。

### 「ジュニア大使友情使節団」

多感な子どもたちが、外国語や異なる文化への関心を軸に「真の国際交流とは何か」を理解し、「正しい国際感覚」を身につけ、「世界的視野」に立てる人材に育てて欲しいとの願いから国内外の公的機関の後援を得て1985年に始まった。これまでのジュニア大使の参加者数は3,714名。IFAでは30年目の今夏、8月には、米国・シアトル班を組織する。



## ジュニア大使の思い出と現在

いま  
すずき たくや  
鈴木 琢也

映像作家

第16回ジュニア大使友情使節団  
米国アラバマ班参加、当時中学3年生

私は2001年に日本の中学を卒業してから、2013年に日本へ帰国するまでの約12年間、オーストラリアのメルボルンへ留学し、映像を中心としたマルチメディアの勉強をしてきました。留学をしたきっかけは、ジュニア大使の研修に参加したことで、世界の捉え方が変わったことにあります。

研修でアメリカのアラバマ州にあるNASA(マーシャル宇宙飛行センター)を訪れた際の、物理的なスケールの大きさや、最新のテクノロジーを応用した設備などに驚いたことは今でも覚えています。実際にNASAで働いてみたいと思ったことがその後の私の人生観を変えていきました。

留学当初、英語を話しても通じない、相手が言っていることが全く聞き取れ

ない状態だったのですが、ジュニア大使での研修がとてども役に立ったことを覚えています。特に海外でのマナー、例えばテーブルマナーやドアを開けた際の他者への気配りなどは日常的に役に立ちました。

また、文化背景の異なる家族とのホームステイを経験していたことは、留学当初にホームシックになることもなく心の支えになりました。しかし、おそらく一番ためになったことは特に英語が話せなくても、コミュニケーションはできるということを経験したことにあると思います。

研修を通じ実際に訪れた、国連やホワイトハウスなどがテレビに映るたび、当時の記憶がよみがえるので、その後忘れられない思い出になっています。

### ●映像作家の仕事

今はオーストラリアで学んだ技術と知識を活かし、映像制作を中心にマルチメディア関連の仕事を手で行っています。ウォルト・ディズニーがアニメーションの世界を現実の社会にもたらしたことに感銘を受け、それに近いことをやってみたいと思っています。

しかし、理由は分からないのですが、日本に戻ってきて急に現実との距離感のようなものを感じ、夢をもちにくい印象を受けました。私には、最終的にはこのような夢をもちにくい環境を変えられる人になりたいという理想があ

ります。それを実現する手段として、映像を選んでいますが、それは映像には人を動かす力があると思うからです。

例えば、「情報としての映像」と「表現としての映像」があります。情報としての映像には複雑な情報をシンプルにまとめる力があり、表現としての映像には、プロジェクションマッピング(建物や物体に映像を投影すること)など、見る者を圧倒する力があります。

今日では世界を繋ぐインターネットがあるおかげで、世界中の状況を昔より即時的で、より身近に感じることができるようになったと思います。特に世界を飛び交う映像が人々に与える影響力には、言葉では説明することが難しい潜在性があると思います。そのような映像の力を使い、環境を変えて行くことが今後の目標です。

「ジュニア大使友情使節団」は、民間レベルでの国際交流活動を促進し、世界の平和に貢献することを目的に小・中・高校生を海外に派遣する事業です。派遣先国の政府や公的団体の後援の下、1985年に開始し、これまで3714名のジュニア大使が誕生し、帰国後も「ジュニア大使クラブ」等を通して、国際交流活動を続け、交流の輪を広げています。IFAでは間もなく「ジュニア大使」(シアトル班)団員募集を開始します。問合せは、☎03-3582-3021 ジュニア大使係





## ジュニア大使が起点

松野 礼子  
第9回ジュニア大使友情使節団  
英国班参加、当時高校1年生

昨年の夏、実家で私宛の一通の手紙を見つけました。それは16、7年ぶりに聞く「ジュニア大使」同窓会のお知らせでした。丁度、第一子を出産したばかりでしたので参加できずに残念でしたが、先日、ホームページでの写真を拝見して本当に懐かしく、鮮明にあのときの経験を思い出しました。

高校生で初めての海外でしたし、イギリス英語の発音に慣れず、「どうしよう」、「わからない」とオロオロしてばかりでした。それでも団長先生や添乗員の先生に質問をしたり、友達と確認し合いながら楽しく過ごしました。

帰国後、イギリス英語の独特な発音やヨークシャー地方の発音が強烈な印象として残り、大学の英米文学科に入りイギリス英語とアメリカ英語を文学や音声学を通して学びました。シェイクスピアやプロンテに触れる度にジュニア大使でストラッドフォードやヨー

クシャーを訪れたことを思い出しました。夏休みを利用して再びイギリスに短期語学留学もして英語漬けの学生生活を送っていた気がいたします。

大学を卒業後、日系航空会社に就職し、地上職を経て客室乗務員になりました。ジュニア大使のときの初めての国際線がこの職に就くきっかけを作ってくれたと言っても過言ではありません。フライト中に間近で働く乗務員の方々が窓の外を見ながら話をしてくれたり、高校生の私に仕事について親切に説明してくれたのです。それまで漠然と思っていた職業をはっきり志すきっかけを与えてくれました。

結婚するまでの8年の乗務人生を振り返ると、楽しくも忙しい日々でした。入社して約1年間の国内線乗務の後、国際線の訓練を受けて担当の国際路線に配属されます。担当路線には毎月フライトが入り、その都市の滞在も多くなります。私は主にパリ、ニューヨーク、シカゴ、シンガポール、中国各都市等で、年度ごとに変わりますが、ロンドンの担当はなく、たまに担当外でロンドンのフライトが入ると嬉しかったです。外国人乗務員とも一緒に働くので、英語はお客様に対してだけでなく、チームで仕事をする仲間との情報共有やほっと一息つくときの楽しい会話など、仲間同士のコミュニケーション手段でした。学生時代の英語とは違い、仕事を通じた英語は人とつながることできる、活き活きとした、素敵なツールでした。世界は広く、考え

も多種多様ですが、大切なことは相手を理解しようとする心で、それは相手にちゃんと伝わるものと実感しました。



ローマ、バチカンの美術館の前で

ジュニア大使のときに機内で撮ってもらった写真をいつもフライトバッグに入れてお守りにしていました。初心を忘れないようにするためですが、フライト中、当時の私くらいの女の子に質問されると、昔の自分を見ているようで懐かしい気持ちになりました。

結婚後退職し、今は主婦となり母となりました。親になってみると改めて高校生の私をジュニア大使に参加させてくれた母、あのときに関わってくださった大人の方々、皆さんに対し深い感謝がこみ上げてきます。皆さんが「広い視野をもって」と子どもだった私たちを大切に思い、送り出し、無事に旅行させてくれたのだと思います。育児や教育も時代によって流行があるようですが、未来ある子どもたちを思う大人の気持はきっと変わらないでしょう。

私も自分の子に「広い視野をもって」と応援できる親でありたいと思います。



## ジュニア大使合同同窓会に寄せて

～第1回団長からの便り～

前号で紹介した「ジュニア大使友情使節団、第1回～第27回合同同窓会」に当日欠席された富澤純英先生（当時、東京都立農業高校教諭、現講師）からの便りを一部編集して紹介する。当時、33歳の先生も今は59歳。ジュニア大使の引率が大きな契機となっていた。

ジュニア大使とのアラバマへの旅、あれから26年も経ってしまいました。が、未だに鮮明に覚えています。

当時の資料はすべて大事に取り、中でもローカル紙に一行の様子を伝える記事が大きく掲載され、記事の中に自分の名前が3度も載っているのが大切に保管しています。現地ではテレビニュースの放映もありました。

この引率を契機にその後20数年間、海外旅行を続けました。特に夏休み期間中は研修と称して必ずアメリカを中心にヨーロッパへも出掛けました。

ジュニア大使と関係の深いアラバマ州は10数年経ってから訪問しました。

ある年ハンツビルに滞在中、ふと思いついて、当時アメリカ側のコーディネーターだったジュニー・ブラウンローさん（どういわけか今でも名前を覚えています）を探すことになってホテルの近くにあるインフォメーションを訪ねました。その時点で10数年前のことなので無理とのことでしたが、ホテルの部屋で休んでいたところ、突然ドアのノックで起こされ、応対した女性がわざわざ直接伝えに来てくれました。「今は他の都市に住んでいるが、先方にあなたのことを伝えておきました。じき連絡がありますよ」とのことでした。そして4日間の滞在中に直接お会いすることができたのです。アラバマの温かさがよみがえったひとときでした。

### ●全米100都市を訪問

ある年は北アラバマのフローレンスに滞在して1985年以来初めて「ブルースの館」を見学しました。そこで皆さんが現地に贈った15周年記念の感謝状が額縁に入り壁に飾ってあるのを見ました。日本語と英語が併記され創始者、横山綾三さんの名前を確認しました。今でも飾ってあると思います。

アラバマ州は他の州よりもやはり関心があり、第1回のときに訪問した場所はすべて再訪し、現地で「あのときは…」と思いに浸ったものです。

過去20数年の間に全米約80都市に滞在し、日帰りで見学した場所を合わせると米国だけで100都市を越えます。

仕事柄、見聞したことを日々の授業で還元できたと思っています。

### ●第1回の子どものこと

数ある思い出の中で小さな出来事ですが、空港の手荷物検査で小学生の団員がカメラを置き忘れ、搭乗中に忘れたことを伝えられたのです。通常では有り得ないのですが、係官に事情を話し一緒にゲートに戻り、無事カメラを取り戻したことで、また交流会で乗馬を楽しんでいた団員が落馬して、念のために病院へ行く際、救急車ではなく、同行していたパトカーで連れて行ったことなど、今でも覚えています。

その初めて行ったアメリカの病院でわかったことがありました。一人の医師が診察して治療し、これで終わりかと思っていたら、もう一人の医師が再度診察して診断に間違いがないかを確認する、いわばダブルチェックが行われていました。しかも医師が一つひとつの診察前に必ず患者本人に告知して同意を得るシステムです。なるほど訴訟の国ならではのシステムだと思いました。

海外へ頻繁に出掛けるきっかけをつくってくれたジュニア大使の引率は、このプログラム立ち上げの大事な役目だったので相当緊張しましたが、2年後に農業研修の引率を依頼されたときはその経験を活かして多少なりともゆとりを持って臨むことができました。あの経験が今につながっています。



# the COMMUNICATOR

IFA

心と心、世界と日本を結ぶ\*コミュニケーター

月号

私と国際交流・インタビュー

## 時代の端境期を生き延びていくために

オーストラリア国立大学 ティーチング・フェロー おみへ やすこ 岡部 泰子

アメリカにある慶應ニューヨーク学院で社会科の教員を勤めたのち、今はオーストラリアで日本語を教えています。婚約者がアメリカのシアトルにいるので、将来はまたアメリカに戻ります。思いがけず海外生活を送ることになりましたが、狙っていたわけではありません。時代を、ただ生き延びていくために可能性を模索し続けて、悪戦苦闘した結果、そうになりました。

日本社会も世界の構造も様変わりする時代の端境期に社会生活を始めなければならない世代でした。アメリカも、オーストラリアも、仕事で行く前には、1度も行ったことはありませんでした。

### ●異文化としての日本

生まれも育ちも千葉県幕張です。歴史や伝統文化のない埋め立て地で生まれ育ったので、そこから「外」の文化として日本を見ていた気がします。住んでいる国でありながら、そこに「異国」の文化の面白さを感じていたので、海外には興味をもちませんでした。でもオランダだけは別です。江戸時代に唯一交易があった西洋の国ということに加えて、地理の教科書の「平ら」な地という記述が信じられなかったからです。オランダだったら行ってもいい、と思っていたときに、新聞で「ジュニア大使」の募集を知り、応募しました。行ってびっくり、オランダは本当に平らでした。さらに、ヨーロッパの人は数ヶ国語を話すのが当たり前ということを知ったり、全く違う世界で驚きの連続でした。引率の早川宗仁団長先生から、「日本は外の文化を受信することは得意だけれども、日本のことを発信することは下手である」と伺いました。今から17年前です。「へ、そうなんだ」、面白いお話だと思いましたが、これが今に通じる私の原点です。

その後、大学、大学院で日本史を専攻しました。良くも悪くも、ただ好きだったからやっていました。でも小泉構造改革に象徴されるように、時代が大きく変わります。コツコツ努力を続けていけばなんとかなる、という生き方は絶望的になりました。30歳までに

学位をとるか、仕事を得なければ、自分は庶人になると思いました。私は仕事と収入を選びました。日本育英会の借金がものすごい額だったからです。



1976年、千葉県生まれ。慶應義塾大学卒業後、同大学院、お茶の水女子大学大学院で日本史を専攻。2005年、在米国際慶應ニューヨーク学院の社会科教員。08年、コロンビア大学大学院入学。10年より、オーストラリア国立大学のティーチング・フェロー（教育助手）。04年に「第9回ジュニア大使友誼使節団・オランダ班」参加。

### ●アメリカに救われる

偶然、見つけた仕事はアメリカにありました。アメリカに行った理由はただそれだけです。仕事があれば世界中どこにでも行く、そうでなければ生き延びられません。アメリカ、特にNY（ニューヨーク）は、日本とは比較にならない多様な背景の人々が同じ街に集まり共に生きている。そのための制度を整えている。こんな私でも生きていける、と思いました。しかし、当面の仕事はあっても、有期契約のため、働きながら次の仕事を常に探す生活です。毎日、重苦しく暗中模索する私を救ってくれたのもアメリカです。今までと同じ職種では生き延びることが難しい。ならば、生き方を変えれば良いではないか。それを教えてくれたのも、可能にしてくれたのも、アメリカです。

私は日本語教師の勉強を始めることにし、コロンビア大学大学院の修士課程（日本語教授法）をめざしました。仕事を続けながら勉強ができるからで

す。応募のとき、トフル（TOEFL）のスコアが基準点にわずかに足りませんでした。しかし、「翌年までに基準点を満たすこと」を条件に入学を許されたのです。日本では考えられないこと、チャンスの国であるアメリカの懐の深さに感動しました。その後、無事に条件をクリアし、仕事と勉強を続けながら日本語教師の職を探しました。しかし、ビザの問題が立ちほだかる。もうアメリカを出るしかないと思いました。

そこで見つけたのが、今のオーストラリアでの仕事です。応募手続きを全て終えてから結果がでるまでが長く、落ちたと思っていました。だめなら日本に帰ろう、と決意していたとき、アメリカ人の婚約者と出会いました。

### ●人類の共有財産、日本文化

日本の歴史や文化、日本語は日本人だけのものではありません。「こういう面白い言葉、歴史、文化がありますよ」ということを知ってもらい、それが楽しい。でも、日本の大学で日本史を専攻していると、海外との接点はまずありません。私は自ら探し求めました。それが3年に及ぶ留学生宿舎でのレジデント・アシスタント活動です。日本に居ながら世界各国の人たちとの日常的交流を可能にする絶好の場所でした。

言葉や人種、宗教が違っていても、人間としては皆同じ。お互いの違いを理解するだけでなく違いを楽しむことを学びました。また、大学主催のケンブリッジ大学ダウニングコレッジ夏季講座にも参加しました。こうした経験のお陰で、いきなりアメリカで働くことになっても、異文化環境での生活という面では、特に困りませんでした。

「社会科の教員から日本語教師へ転職」とつい最近まで思っていました。でも、丸ごと日本を伝えるということでは、むしろ融合だと今は思います。

世界は今も先が読めないままです。そうした時代を生き延びていくために、新しい挑戦を楽しみながら、常にフレキシブル（柔軟）であり続けたい。そのために、常に自分を鍛えることを怠らず、次に備えていたいと思います。





### ジュニア大使合同同窓会

～ジュニア大使クラブ主催～

社団法人国際フレンドシップ協会 (IFA) では「ジュニア大使友情使節団」の参加者を対象に「ジュニア大使クラブ」(参加任意)を組織し、使節団参加後も継続的な国際交流活動を推奨し、国際交流・協力の提案を受け付け、交流事業の参加を呼び掛けている。去る10月23日には、ジュニア大使クラブ主催の第1回～第27回ジュニア大使合同同窓会が実施された。これまでの参加者3,696名を対象に今春から準備を開始し、参加者からの出欠やメッセージの整理は、参加者からボランティアを募って行った。当時、中学生だった第1回の参加者も40歳となった。ここに同窓会の概要と参加者からの感想を紹介する。

◇  
日 時：2011年10月23日(日)  
13:30～16:00  
場 所：国立オリンピック記念青少年総合センター  
参加者：引率者12名、

ジュニア大使140名  
次第：(敬称省略)  
13:30-13:35 開会  
13:40-14:00 創始者横山綾三挨拶  
14:00-14:20 引率者紹介  
会場資料紹介  
ボランティア紹介  
14:20 乾杯 (第1回アラバマ班)  
多胡 有佳子 (高校英語科教諭)  
小田切 大輔 (東京都庁)  
大谷 宣史 (東京消防庁)  
(歓談)  
14:45-15:00 参加者近況発表  
押切 真千亜 (第4回アラバマ班、国際協力機構)  
岡部 泰子 (第9回オランダ班、オーストラリア国立大学)  
宮本 朋彬 (第19回英国班、米国カリフォルニア州留学)  
15:00-15:20 ウルトラクイズ  
各班の訪問先資料より問題  
(歓談)  
15:45-15:50 IFAからのお願い  
16:00 閉会

◇  
金子 理恵 (旧姓、久保井)  
第5回オランダ班参加

先日はジュニア大使同窓会を開いてくださりましてありがとうございます。とても楽しい時間を過ごさせていただき感謝の気持ちで一杯です。ジュニア大使に参加いたしましたのは22年前のことになりますが、当時の様々な記憶がよみがえり、今、忘れか

けている何かを感じながら帰途につきました。



ジュニア大使は私の人生の転換期となり、良い意味で大きな変化をもたらし、私にとっての財産であり宝物です。娘が大きくなりましたら是非、参加させたいと今からワクワクしております。私自身、自分の子どもをもち初めて皆様の子どもたちに対する想いを理解するに至り感謝の気持ちを伝えられずにはいられなくなり筆をとった次第です。

北村 恵 第7回アラバマ班参加

先日は大変おつかれさまでした。そしてあのような同窓会を開いてくださり感謝申し上げます。実はアラバマと一緒にホームステイをしたお姉さんがいらっしゃって昔話に花が咲いてしまいました。最初は同じ年の同じ班ということ喜んでいたのですが、ホストファミリーの話になりお互いが一緒にステイした者同士ということがわかりました。とてもうれしかったです。サプライズってこういうことですね。



### ジュニア大使、ビジネスマンに

長谷川 隆是

ホテル ルモンド 代表取締役  
(第5回ジュニア大使友情使節団  
米国アラバマ班ならびにマレーシア班参加、  
当時小学5年生)

「ジュニア大使」としてアラバマに赴いたのは今から23年前の1988年、小学校5年生のとき。引率の先生方と日本中から集まったジュニア大使たちが仲間となり、初めて親元を離れ異国を訪ねるという試練でした。日本語も静岡の方言しか知らずジュニア大使同士のコミュニケーションですら違和感を覚えていたのに、訪問した先のアラバマのホストファミリーは当然英語しか話してくれません。意思疎通を図ることの難しさとその重要性に人生ではじめて気がついた瞬間です。もっともその瞬間は「喉が渇いたよ」「トイレに行きたい」など、意思の疎

通どころか根源的な欲求を伝えることに必死になっていたと、今になって思います。けれども、必要に迫られれば当然行動するもの。お陰様でいわゆる日本人のシャイさを帯びることなくコミュニケーションの端緒を掴むことができました。

ジュニア大使としてのそんな経験があったからでしょうか、その後の生活の中で旅行者として、出張者として、駐在者として幾多の国を訪れる好機に恵まれたのですが、物怖じすることなく見聞を重ね、気がつけば複数の言語を解するようになっていました。

もちろん言語などは所詮道具。言われて久しいですが、その背景にある文化、歴史、慣習などこそが肝要なのです。そしてそれらの肝要な点を解するために最も重要な要素は「慮り(おもんばかり)の精神」です。ジュニア大使でその片鱗に触れた、アラバマを含む米国南部が唱える“Southern hospitality”(南部のもてなし心)に通ずる精神です。

異文化間での「慮り」はそれぞれが異なる価値観に依拠して慮るわけですから等しい結論を導くとは限りません。また誤謬(ごびょう)が発生する可能性もあります。そうすると必要となるのが軌道修正をするための意思伝達手段としての言語であろうと思います。



参加6年後のジュニア大使同窓会  
於：国立オリンピック記念青少年総合センター  
後列左から2番目

つまり、適切なコミュニケーションには方法論としての「慮りの精神」と、手段としての言語の双方が必要不可欠な要素なのでしょう。

現在、私は静岡県浜松市にて家業のホテル業を継ぎ、様々なお客様とのコミュニケーションそのものを生業としています。正にホスピタリティ産業の真っ只中です。

手段としてのホスピタリティから、目的としてのホスピタリティへと意識のもち方こそ変化しているものの、その本質は変わりません。これからジュニア大使や様々な形で世界に羽ばたく皆さんにもこの本質は普遍的に当てはまることであろうと思います。是非とも世界の様々な街でそれを体験し、そして次の世代のコミュニケーターへと飛躍していただきたいと思います。





いま  
ジュニア大使の思い出と現在  
きたむら めぐみ  
北村 恵

法律事務所勤務  
第7回ジュニア大使友情使節団  
米国アラバマ班参加、当時小学5年生

1991年夏。あの特別な時間からすでに20年が経とうとしています。あの時配られた「HELLO ALABAMA」という英語での簡単な挨拶や歌のついた冊子を久しぶりにめくるとそこには集合写真が2枚はさまっていました。1枚は現地の小学校で、もう1枚は場所は特定できませんが、ジュニア大使のあの白いプレザーを皆で着ているものです。どちらの私も緊張した面持ちで写っています。今ならあの頃の私に言いたい。「もっと肩の力を抜いて楽しんで」と。  
ジュニア大使友情使節団に応募したきっかけは母の勧めでした。子どもの邪心のない、澄んだ目で世界を見つめるようにと背中を押され応募のため作文を書いたことを覚えています。

実際参加してみると、大変な人見知りや協調性がなくマイペースだった私にとってジュニア大使はなかなかの試験だったように思います。私は当時ひたすら本の虫で友達の輪に入ることより本の世界にどっぷり浸ることの方が楽しい一風変わった子どもだったので。登下校も本を読みながらだったのでないでしょうか。そのような私が集団生活の中にいきなりボンと入れられたのですから、そううまくいくはずもありません。

ずいぶん苦しい思いをしながらのアメリカでしたが、この経験は当時、思春期にさしかかる私にとっては通るべき通過儀礼だったのです。人と人とのつながりがどんなに大切なことなのかということ、どれだけ多くの人にお世話になり、そのおかげで今の私があるのかということ、何より世界は大きい、ということを実感するきっかけでもありました。今、思うと母の愛あるショック療法だったのでしょうか。あのとき、アメリカの大地を踏んだ一歩が私を大きく成長させてくれたのです。

その後、中、高、大、大学院と進み、縁あって現在は法律事務所にも勤めています。どの場においても尊敬し信頼できる人との出会いがあり、有り難いと感謝する日々です。中でも昨年の春、IFAを通してスウェーデン人の高校生の女の子のホームステイの受け入れをしたことは私だけでなく家族にとってもかけがえのない経験となりました。

今まで何度かホームステイの受け入れはしていましたが、ここまで喜怒哀楽を共有し絆を感じる出会いはありませんでした。いつの日か彼女の暮らすスウェーデンに行ってみないとね、と家族で話しています。まるで遠い北歐に家族ができたようです。

仕事柄、人間関係の脆さや狡さに心を痛めることも少なくありません。すべてが円満に解決できるわけではありませんが最善の策を尽くし、少しでも心の負担が軽くなるお手伝いができればと考えています。これから世の中は人も物事もどんどん複雑になっていってしまうのだらうと思います。どうか未来が明るいものになるようジュニア大使に参加する子どもたちにはぜひ邪心のない、澄んだ目で世界を見、そして感じて欲しいと願ってやみません。

「ジュニア大使友情使節団」は、民間レベルでの国際交流活動を促進し、世界の平和に貢献することを目的に小・中・高校生を海外に派遣する事業です。派遣先国・地域の政府や公的団体の後援の下、1985年に開始し、これまで3,677名のジュニア大使が誕生し、帰国後も「ジュニア大使クラブ」等をとらして、国際交流活動が広がっています。現在、IFAでは環境と平和、交流をテーマに「ジュニア大使」(パラオ班)の参加者を募集しています。詳細は、☎03-3582-3021 ジュニア大使係へ。



いま  
ジュニア大使の思い出と現在  
よしの ゆかこ  
吉野 由佳子

大島町立さくら小学校教諭  
(第14回ジュニア大使友情使節団  
イギリス班参加、当時大学1年)

現在、私は伊豆大島の小学校の音楽の教師をしています。どこまでも広がる青い空と海に癒され、新鮮な海の幸に感激する毎日です。春は桜、初夏は紫陽花、冬は椿、と四季折々違った表情を見せる自然に心と和ませています。

ジュニア大使として英国へ旅立ったのは、今からもう10年以上前になります。初めてのホームステイ、日本大使館での講話など今でも記憶にはっきりと残っています。帰国後は何年かに渡ってジュニア大使クラブで、英国や太平洋島嶼国との学生と交流するという貴重な体験をさせていただきました。そうした活動の中で、私はジュニア大使として外国の人に何か自分から発信していくことはできないかと、日本

の伝統楽器の三味線を始めました。私の通っていた音楽大学ではヨーロッパのクラシック音楽が学びの中心のため、日本の伝統音楽を学ぶ生徒はほんのわずかでしたが、全くの素人ながら私はその魅力にのめり込んでいきました。

ジュニア大使クラブの交流会で何度か三味線を弾かせていただいたことがあります。楽器を見せると珍しがられ(これは日本人でも同じなのですが)、音色を聴かせると「Japanese sound! (日本の音色)」と喜んでもらえました。言葉ではなく、自分の大好きな音楽を通して外国の人と分かりあえることができた瞬間でした。この経験が今の私の夢である「子どもたちに和楽器の魅力伝え、広めたい」という原動力になっています。

以前勤務した江東区の学校では和楽器の合奏団を創り、日本の伝統文化の素晴らしさを伝えてきました。大島では、今年3月の卒業を祝う会で12人の6年生全員で琴と三味線の演奏をしました。日本人として何か外国の人に



伝えたいと思い習い始めた三味線が今では私のライフワークです。これもジュニア大使の経験がなければ、ここまで日本の伝統文化に興味を持ち、深くかかわることもなかったと思います。

遂に学校教育の現場ではコミュニケーション能力の育成を目的として英語が教科として導入されました。何年も前からジュニア大使で実践されていたことが今では誰もが求められているのだと実感しているところです。ジュニア大使で学んだ、言語ではなく心の豊かさで向き合っていくことを大切に今後も素敵な教師を目指して前進していきたいと思っています。

第26回夏期ジュニア大使友情使節団 2010年8月 団員募集

当協会では、今夏実施する「ジュニア大使・米国シトル班」の参加者を募集しています。本事業は多感な子どもたちが国際社会への理解や外国語への関心を深め、様々な文化に接することを通して正しい国際感覚を身につけ、立派な国際人材として育ってほしいとの願いから、訪問先の公的機関の後援を得て毎年、組織しています。詳細は以下の通り。

- 実施機関：社団法人国際フレンドシップ協会
- 後援：米国ワシントン州政府
- 研修期間：8月19日～29日
- 参加資格：中1～高3 30名予定
- 参加費用：53万1千円。燃油サーチャージ別途
- 応募方法：「応募用紙」を請求の上、応募
- 応募締切：7月15日(木) 必着
- 募集説明会：7月17日(土) 午後(予定) 東京

■問合せ先：社団法人国際フレンドシップ協会 担当：長谷川、及川 TEL 03-3582-3021





## 10年間、変わらないもの

やぶちとともあき  
矢澤 和明  
慶應義塾普通部 理科教諭  
(第15回ジュニア大使友情使節団  
イギリス班参加、当時高校1年)

「ジュニア大使」としてイギリス班に参加して、10年の月日が流れた。それまで行動範囲に限られていた私が最も強く感じたのは、国際的に活躍するには、自国に対する理解を深め、誇りをもつとともに、英語を母国語とする人が手加減不要と考えるような英語力が大切だということである。この旅を境にして、常に二段階上の力を目指す、英語との付き合いが始まった。

高校生の頃は、慶應義塾のプログラムで再度イギリスを訪れたことに加え、各国から招聘される高校生・大学生との交流活動に積極的に参加した。私の経験では、学校の授業や検定試験の勉強を続けても、英語力の向上にはつながるが英語を通じたコミュニケーションのコツはなかなか分からない。英語を使って自分自身や日本のことを表現

する面白さと難しさを実際の場面で味わうことで、気軽に英語を話せるようになってきた。一方で、高校生レベルの英語力では、互いの国について分かった気になるのが皆一杯で、少々込み入った話をするための適確な発信能力の必要性も痛感した。



横山先生を囲んで。向かって右から2番目が本人

大学では理工学部に進学し、急速に発展している生命情報学を専攻した。最新の研究成果は英語の論文で報告されるなど、科学の世界の共通語は英語である。学術的に高度な英語運用能力を習得しようとケンブリッジ大学での夏期講座に参加し、英語による講義と討論、レポートの執筆などに取り組み、学問を英語で学ぶ面白さを知った。卒業論文を英語で書くことを目標に Academic writing にも挑戦し、大学内のコンテストで一等賞も受賞した。英会話の段階に終始せず、学術的にも通用する実用的な英語力を身につけることができた。

現在は、縁あって母校の慶應義塾普通部で理科を担当している。授業時間に余裕がある場合には、既習内容について英語で書かれた教科書や新聞の記

事を見せたり、宇宙ステーションとの交信を dictation させてみたり、英語のスパイスをかけた科学を生徒たちに教えている。英語の発想で科学をとらえる仕掛けをたくさん用意することで、これからも英語との縁を切らずに進みたい。

10年前、慣れない英語を必死に使った2週間のイギリスの旅は濃密で、人生で初めて人と別れることが辛く悲しくて解団式で涙を流した。学校生活を通しての友人とは明らかに異なる、かけがえない仲間ができた。以来、団員が多く住む広島、長野、東京、横浜などで皆が再開する「集合計画」を続けている。去る3月20日には、イギリス班参加10周年を記念して14人が集まり、当時団長としてご指導いただいた横山三三先生にもご出席いただいた。数年のブランクを経て再会しても、すぐに打ち解けられる変わらない仲間がいる。この強い絆を、これからも大切にしようと思う。

## 「ジュニア大使」について

ジュニア大使とは、海外の公的機関の後援の下に実施される「ジュニア大使友情使節団」の参加者で、民間レベルでの国際交流活動を促進し、世界平和に貢献することを目的に海外に派遣された20歳未満の小、中、高、大学生です。同事業は昭和60年に米国への派遣に始まり、これまで、3,677名が参加しています。

また、帰国したジュニア大使で作る「ジュニア大使クラブ」では、海外から日本に招かれる個人やグループに対してホームステイや交流の機会を提供しています。



## 「ジュニア大使」、留学中

みやもと ともあき  
宮本 朋彬  
米国カリフォルニア州、サンタモニカ・カレッジ  
(第19回ジュニア大使友情使節団  
イギリス班参加、当時高校3年)

私のいるロサンゼルスは、日本とは似ても似つかぬ不思議な土地です。気候は温暖で降雨量も少ないため、ほとんどの人々は半袖短パンで一年中過ごしています。皆、とても明るく朗らかな性格で、交差点で信号待ちをしているときに、知らない同士でも世間話をするような日常を送っています。

日本の高校生のときに、「西洋人は合理的で、感情を廃して過ごしている」と学びましたが、ロサンゼルスの現実とは全くの逆でした。私の周りにはカリフォルニア人はいつだって感情を一杯一杯に出して過ごしています。私は、バイク（いわゆるモーターサイクル）で大学に通っていますが、1年半ほど前、通学中に交差点の真ん中で転んだことがありました。すると、信号待ちをし

ていた運転手の人たちがわらわらと出てきて、バイクを起こして路肩に寄せ、「大丈夫か」「怪我はないか」と駆け寄ってきました。私には怪我はなかったのですが、とても心温かい行動に胸打たれ、思わず涙ぐんでしまいました。今でもあのときのことを思い出すと感謝の念が尽きません。

アメリカで最も優秀な生徒はどんな生徒だと思いますか。それはやる気のある生徒です。私の大学では、どの授業でも先生と必死に話し合う生徒の姿が見られます。彼らは課題を追加してもらえよう折衝しているのです。その追加の課題で成績の底上げを図るのです。テストで80点を取ったら、20点分の課題を追加して100点になるという仕組みなので、テストが苦手な生徒でもレポートやその他の課題で点数を稼ぐことができます。一方で、授業外での課題に費やされる時間がはるかに多くなり、やる気のある生徒しか手を出しません。それ故、好成绩を修める生徒の大半は必死に課題を求め、勉学に時間を費やす生徒になるのです。テストの成績だけでは、卒業できません。

専攻科目の勉強のほかに、大学の日本語クラスで、ティーチャーズアシスタントをしています。主な仕事は、先生のサポート、生徒のチュータリング（個人指導）、課題の採点など様々です。

アシスタントと言えれば聞こえはいいのですが、なかなか骨の折れる仕事です。授業から遅れてしまっている生徒

を指導したり、授業中に日本語でのコミュニケーションのモデルをやったり、歌謡曲の「津軽海峡冬景色」を歌わされたこともありました。恐らく、普通の大学生よりも忙しく、体力を使います。生徒から問われる質問は日本語だけに留まりません。日本のアニメや映画等の質問から、歴史・文化・民族に至るまで、様々な質問をします。意外と多い質問は「天皇とは何」という質問です。「象徴」だと答えましたが、今の日本人がどう捉えているかは、私には全く解りません。心に留め置いている質問です。

アシスタントを始めた当初は腑に落ちない質問ばかりされているようで、毎日苦虫を噛み潰して飲み込んだような気分で参加していたのですが、最近では、より積極的にそういった議論に参加するようにしています。未だ答えの見つからない質問も多いのですが、そういった議論を通して、アメリカ人の面白い一面に触れているのがとても楽しく、充実した大学生生活です。

## 「ジュニア大使」募集のお知らせ

ジュニア大使とは、海外の公的機関の後援の下に実施される「ジュニア大使友情使節団」の参加者で、民間レベルでの国際交流活動を促進し、世界平和に貢献することを目的に海外に派遣された20歳未満の小、中、高、大学生です。同事業は昭和60年に米国への派遣に始まり、これまで、3,677名が参加しています。

社団法人国際フレンドシップ協会では、平成22年春に実施する第25回同回「米国チキニス班」(小5~中3)の参加者を募集しています。詳細は、同協会事業部 ☎03-3582-3021。





## 自治体の交流事業を支援

### 東京都・昭島市の中学生を “ジュニア大使”に迎える

IFAは、地方自治体とともに地域の国際化や国際交流事業に取り組んでいる。今夏組織する「ジュニア大使友情使節団」シアトル班に昭島市の中学生を初めて“ジュニア大使”として受け入れることとなった。同市は、昨年の米国教育者の受け入れをきっかけに、今後、市民の国際交流を続けるべく、まずは、IFA“ジュニア大使”に同市中学生を派遣することとし、市内にある7つの中学校から面接・選抜の結果、7名の団員を決定した。

去る6月4日、市担当者、団員、保護者を対象に説明会を実施。それぞれに熱意のある抱負を語ってくれた。ここに、2名の応募作文を抜粋してご紹介する。

なお、シアトル班は、岩手県普代村や栃木県大平町からの自治体派遣団員のほか、一般公募の団員で構成される。

奥村 友美

昭島市立多摩辺中学2年

私の将来の夢は医師になることです。もしも私が医師になれば、世界中を周って少しでも苦しんでいる人の役に立てたらと思っています。まだ全然、医学の知識はありませんがこれから確実に誰かのために、自分のために頑張っていきたいです。

なぜ私が医師になりたいと思ったかという、以前から憧れていたのも理由の一つですが、決定的にそう思ったのはあるテレビ番組を見てからです。そのテレビ番組は、世界で活躍する日本人医師達のことをやっていました。私の目に映ったものは、懸命に患者を治そうとする一人の日本人と外国人の医師達でした。彼らは国籍も違うのにこんなにも協力し合い、たくさんのお患者を治療していました。そのときに、私もこんなふうの世界中の人を助けてあげられる医師になりたいと強く心と思ったのです。

彼らようになるためには、たくさんの人と心を通わせ、言葉を通わせなくてはならないと思います。だから、英語も本格的に学びたいです。

私がこの海外派遣事業に応募した動機は世界中のより多くの人と心を通わせたい、話し合ってみようと思ったからです。そして、もう一つの理由は自分の大きな夢に向かう第一歩になるのではないと思ったからです。

高橋 悟

啓明学園中学2年

今回の海外派遣生募集の行き先である「シアトル」と聞いて、私が思い浮かべるのは、ウィンドウズを世に出したマイクロソフト社と、シアトルマリナーズで活躍するイチロー選手です。この両方に共通して言えることは、世界に通用する才能が存分に生かされているということです。

この全く質の異なる二つの才能が世界の注目を集めているのがシアトルです。この街にそのようなアメリカ文化を象徴する才能を集める何かがあるのでしょうか。私はこの街に是非、行ってみたいと思います。

今、世界のリーダーともいえるアメリカと異なる文化の国々との紛争が相次いでいます。何故、そのようなことが起こっているのか、それはお互いの国の文化を理解していないことが一番の原因だと思います。一人でも多くの人と知り合い、友達になることが世界平和の近道だと思うのです。そして私はこの機会に、ホームステイという形で少しでもアメリカの文化を理解したいです。

私の夢は、通訳者や翻訳者、あるいは、外交官他、外国の文化にかかわる仕事をする事です。そのためには、外国の人との交流に慣れる必要があり、それには会話が重要です。会話をとおして、外国との掛け橋になりたいです。



## 「ジュニア大使」になった、

### あの時の夢が実現

1994年、「ジュニア大使友情使節団」のマレーシア班に当時6年生で参加した宮本荘岳さんは、帰国後、外交官になりたいと思い、中学の時にオランダ班に参加した。その後、高校でイギリスに留学、ケンブリッジ大学と進み、この夏、念願の国家公務員試験に合格。現在、来春の外務省入省を心待ちにしている宮本さんに、10数年の夢を追って過ごした学生時代を語ってもらう。

◇

私は高校でイギリスに留学した時に、既に外務省に入って働きたいという意志をある程度明確にもっていました。当時外務省に入るためには英語力が必要だと思っていたので、イギリス留学は自分の英語力を向上させることに主眼を置いていました。当初、留学は1年間のみと思っていたのですが、1年経って見たときに成績も伸び、高校で

十分にやっつけられる力がついたと思ったので、両親と相談の上、そのまま高校に残ることにしました。私の高校は、南ウェールズにあった寮制のパブリックスクールです。パブリックスクールというのは、現在でも英国の繁栄を支える基盤となっていて、多くの優秀な人材を育て世に送り出しています。私の学校も、一人ひとりの生徒を全人格的に責任感のある立派な人に育てることを教育の目的に捉え、寮長や先生方には厳しく指導されました。Noblesse oblige（高い身分に伴う義務）の素地を体染み込ませる、そんな教育であったような気がします。

高校で勉強した科目は、英語と地理そして美術を除き、全て理科系の科目でした。それは、教務主任に良い大学に進学するためには、英語がそれほど問題にならない科目を集中的にやるべきだと進言されたためです。そのため、日本では理科嫌いだっ私も物理、化学、数学を中心に勉強しました。面白いもので、文系であっても理科系に興味、関心が湧いてくると自然と勉強も苦にならなくなり、良き先生たちとの出会いも相まって、大学でも自然科学を専攻したいと希望するようになりました。この時点で、外務省志望の意志はいったん下火になります。燃っていた程度というのが実際のところでした。今まで興味がなかった新しい視野を開拓できるチャンスではないかと思い、大変興奮していた時期でもありました。



宮本 荘岳  
栃木県・矢板市

大学では自然科学部に属し、物理と化学を専攻しました。毎日が講義、実験そして教授の個別指導の連続で、大変忙しい3年間を過ごしました。しかし、勉強の内容は刺激的で、分野の最前線で活躍されている教授の講義や、ノーベル賞受賞者などの著名な方々のお話を聞く機会にも恵まれ、自然科学を通して真理を追究する面白さも味わいました。そういった意味で私の大学生活はとても充実していました。

では、なぜそこまで充実していた自然科学の勉強をやめ、やはり外務省を目指そうと思ったのか。それは大学院に進学するか考えた時に、自分の原点を探るプロセスを踏み、これまで7年間の英国での生活は、日本という母国を抜きに考えられないことに気づいたからです。と同時に、日本を強く想う気持ちをもつようになり、そんな私のバックボーンとなっている国のために何かできないかと切に思いました。そして今までの私の経験を生かし、より良い日本のために働けるのは外務省しかないかと改めて思うようになりました。

あの「ジュニア大使友情使節団」に参加し、大切なことを感じ取ったことが、今の私に繋がっているのです。



## 小さな旅の大きな影響

こじま さやこ  
小島 彩綾子

第6回春期ジュニア大使友情使節団・オランダ班に参加した小島彩綾子さん（当時、中学3年生）は現在、ジュニア大使の経験をいかし社会で活躍している。このたび、オランダ班の現地受入先であったAPEP（財団法人大西洋太平洋交流計画）の求めに応じ、当時の経験と現在の仕事について、同団体の機関誌に英文で寄稿した。ここに、その日本語訳を紹介する。

1991年7月、30名のジュニア大使友情使節団の一員として、私はオランダを訪問しました。当時15歳だった私のこの8日間の旅は、それまでの、そしてその後の人生にもっとも影響を与える出来事となりました。

この旅に出る前、私はオランダについてほとんど知らなかったと言わねばなりません。しかし、ジュニア大使友情使節団への参加によって、私の貧しいオランダ理解は劇的に変わりました。「ジュニア大使」は単なる観光ではなく、普通の旅行では巡ることのない多くの興味深い場所を訪れます。例えば、地面より高いところを流れる川。初めて自分の目でそれを見たとき、利用可能な土地を効果的に広げたオランダ人の知恵に感服したことを覚えています。また、アンネ・フランクの家では本棚の裏側に作られた隠れ家を見学し、世界平和が何よりも重要であるという信念を抱かざるをえませんでした。その他にも、酪農場や美しい花畑など、今でも生き生きとした記憶の残る素晴らしい場所を訪れました。

ユトレヒトのDe Haas夫妻のもとにホームステイした週末は特別な体験となりました。彼等との出会いは私の「宝物」といってもいいでしょう。たった3晩の滞在でしたが、私たちの付き合いはその後10年以上続いています。1998年にはこのオランダの両親と日本で再会し、彼等を東京見物に案内する機会がもてました。私自身も近いうちにオランダに彼等を訪ね再会したいと思っています。

「ジュニア大使」としての重要な役割に日本文化を



小島氏の原稿が掲載されたAPEP発行『The Exchange』誌

オランダ人に紹介するという任務がありました。私はロッテルダムの市庁舎で茶道の実演をしましたが、多くのホストファミリーが見守るなかで茶を立てるといふ貴重な体験にとっても興奮したのを覚えています。

使節団に参加したことで私はオランダへの興味を深めましたが、同時に母国・日本について深く学ぶ必要を強く感じました。オランダ人が自らの国をとっても誇りにしていることに感銘しながら、自分が日本についてほとんど何も知らないことを悟ったのです。このときから私は、日本と日本文化をよりよく知るための努力を始めたのです。

最初は国立劇場で仕事をし現在は文化庁で働いていますが、日本文化の継承に貢献できることをとても誇りに思っています。もし15歳のときにオランダへ行っていなければ他の仕事をしていただいかもしれません。私は、情報工学の飛躍的な進化や生活のペースの加速化にもかかわらず文化を保持し次の世紀へと携えていくことが重要であると考えていました。オランダ訪問の経験によって、この私の考えは確信へと変わりました。私の出会ったオランダの人々は彼等の文化遺産を大切にしていました。同様に、私は日本文化を次世代の人々に受け渡す仕事を続けたいと思います。日本文化を大切にすることは他の文化と人々を尊敬することにつながると信じるからです。

毎年春になると私の家の庭はオランダから送られたチューリップとヒヤシンスでいっぱいになります。この花々は私にとっていつまでも続くホストファミリーとの友情の象徴であり、また彼等の国オランダとの友情の象徴でもあります。（一部略・文責SPJD）





## 世界を広げたアメリカ体験

今回は、11年前にジュニア大使アラバマ班の一員として渡米し、現在アメリカのメリーランド州で日本語を教える助手として活躍している川谷展子さんの現地レポートを紹介する。

現在、私はローラシアン協会と国際交流基金日米センターが共催している日本語教師助手派遣プログラムに参加しています。メリーランド州の私立の一貫校で小学生（Pre-1stから4th）と高校生（9th）に日本語を教えるお手伝いが仕事で、私にとっては2度目のアメリカです。

最初にアメリカに来たのは1989年、ジュニア大使アラバマ班の一員として初めての海外経験をしました。わけもわからずアメリカへ渡り、そこで多くの方のやさしさにふれたことが、私が国際交流の仕事に興味をもつきっかけとなりました。ジュニア大使に参加された多くの方がそうであるように、私にとってもアラバマでの体験が今の私の原点です。

大学での専攻は日本語教育と日本文学で、昨年の卒業論文では在日外国人児童・生徒の日本語教育について取り上げました。このテーマを選んだのは、高校時代にジュニア大使の合宿でベトナムの子どもたちと交流したことが、私にかなり影響を与えたためだと思います。今、こうして私の世界を広げてくれたアメリカで日本を伝えることができ幸せです。

私の教えているSt. Pauls Schoolでは、Pre-1stのときにスペイン語と日本語を9週間ずつ体験し、1年生になるとどちらかを選択して小学校卒業まで同じ外国語を学びます。小学生は、基本的に異なる文化の理解に重点をおき、歌やスキットを通して楽しく日本語を学んでいきます。

今年は特に高校生に力を入れており、

毎週1回、文化紹介の時間があって、聴き取りの練習もかねた方法で日本文化を紹介しています。その他、漢字をいかに効率的に学習してもらうかを考えたり、教材を作成したりと忙しい日々ですが、充実しています。

住居はホームステイであるため、日本文化を伝えると同時に私も学習者としてさまざまな経験をさせていただいています。日本では行ったことのなかった教会にも時間の許す限り足を運ぶなど、宗教を含め、日本には考えなかったであろうことをいろいろと考えています。

こちらでの滞在も6カ月目に入り、車の運転にも慣れて、だいぶゆとりが出てきました。これからも、仕事、ESL（英語教育の勉強）、旅行など、精一杯アメリカを満喫したいと思います。帰国後どうするのかは、まだわかりませんが、教育関係・国際関係の分野で何かできたらと思っています。（川谷 展子）

### 「ジュニア大使」募集のおしらせ

「ジュニア大使」とは、外務省の後援の下に行われている「ジュニア大使友情使節団」、また自治体の青少年で組織されたジュニア大使等親善使節団の参加者で、民間レベルでの国際交流活動を促進し、世界の平和に貢献することを目的に海外に派遣された小・中・高・大学生のことです。同事業は昭和60年に米国への派遣に始まり、これまで3,063名が参加しています。

（社）日本外交協会では、今夏実施する「ジュニア大使」（米国アラバマ班・米国シアトル班・中国班）の参加者を募集中です。参加資格は小5～20歳未満の児童・生徒・学生。詳細は☎03-3582-3021 国際事業部へ。締切りは平成12年5月22日です。



## ジュニア大使参加を原点に 海外との橋渡し役として活躍

「ジュニア大

使友情使節団」は、

多感な子供たちが国際交流への理解や外国語への関心を深め、将来立派な人間に育つことを願って(社)日本外交協会が企画・実施しています。1985年から米国をはじめとする国々へ小・中・高校生が毎年春と夏に派遣されています。

87年夏の第3回ジュニア大使ヴァージニア班に参加した三木理恵さんは、ジュニア大使に参加したことをきっかけに国際交流に興味をもちはじめ、現在、広島県庁の国際交流課でまさに海外との橋渡し役として活躍しています。今回は、三木さんにジュニア大使参加当時の思い出と、現在に至るまでをふり返り、語ってもらいました。

今年2月、外務省の会議に出席した時のこと、私は予期せぬ方との再会を果たしました。日本外交協会の及川さん、私がジュニア大使としてアメリカを訪問した時の引率者です。突然のことに驚くと同時に、私の中には10年前の夏が鮮やかによみがえってきました。

初めての海外旅行、英語への不安、ホストファミリーはどんな人たちだろうか……。出発前の私は、期待に胸をふくらませる余裕もないくらい、不安ばかりを抱えており、背中を半分両親に押される形での出発でした。しかし、アメリカでの日程が進むにつれて不安は一つ一つ新しい発見や驚き、そして感動に変わっていきました。その中でも、



広島県庁の国際交流課で生き生きと働く三木さん

言葉だけが意志疎通の手段ではないことをホームステイ先で知り、そして家族の一員のように私を迎えてくれたホストファミリーに感激したのを今でもはっきりと覚えています。

ジュニア大使事業に参加した後、私は英語と国際関係に興味をもちはじめ、高校卒業と同時にアメリカへ留学。大学では国際学とスペイン語を学びました。帰国後は広島県庁に就職し、現在は国際交流課で、県が国際協力事業の一環として海外から招いている留学生や研修員の関係の仕事をしています。

今、改めて考えてみると、高校生の時にジュニア大使事業に参加したことが今の私の原点になっているように思います。あの時、この事業に参加していなければ、高校を卒業してすぐに留学することもなかったでしょうし、今のような仕事にもついていなかったでしょう。私がいかに広い世界に興味をもち、目を向けるようになったきっかけはこの事業への参加だったことを考えると、仕事を通じての今回の再会も単なる偶然ではないように思えてきます。

10年前にホストファミリーから受けた「さりげないやさしさ」、これを常にもち続け、今後もより多くの外国人に接する仕事ができたらと思っています。





## ジュニア大使クラブ 英国の青少年と交流

「ジュニア大使クラブ」とは(社)

日本外交協会主催の「ジュニア大使友情使節団」の参加者を対象に、その経験を生かしていくために、国際協力や平和のための民間外交・交流のあり方などにつき、共に学び実践する場である。

具体的には、国際相互理解を深めるための交流会や、さまざまな国際問題についての学習会、ジュニア大使参加者同士の親睦を深めるための合同同窓会実施等の活動を行っている。

去る4月には英国から来日中の青少年20名を迎え、第7回目となる交流合宿を行った。その時の感想をつづった会員たちの作文を、以下、ご紹介する。



松井 七魅

短い時間内のイギリス人との交流。たったの2泊3日だけなのに、その間にあった一つ一つの出来事はとても充実しており、またたくさんの事を学べたような気がします。言いたいことが思うように英語に訳せなくて話がはずまず、自分を情けなく思う時もありました。反対に、相手の冗談と一緒に笑えた時などは本当に嬉しかったです。英語がペラペラとは話せない私にとって、言葉よりも顔の表情が相手を知る貴重なもの



ディスカッションの後、共にゲームを楽しむジュニア大使と英国の青少年たち

でした。笑った顔、困った顔、寂しそうな顔、ひきつっている顔(?!)、それらはみんな共通だということを交流会に参加するたびに感じます。このセミナーに参加して感じたこと、学んだことをこれからも大いに生かして、さまざまなことにチャレンジしていきたいと思います。

小菅 淳

合宿中、ディスカッションの時間に説明があった英国の学校のシステムが、日本とは違って、勉強する教科を選択できるというのが印象的だった。自分の好きな事なら、少しぐらい難しくてもちゃんと勉強するだろう。自分の高校では、大学受験に向けての勉強しかやらないので、つまらないと思う教科もあり、これでは伸びていけないと思う。

この合宿で、英国の異文化や生活ぶりがわかって、自分の学校生活についても見直すことができた。自分はやはり、教科を選択できる英国のシステムがいいな、と思う。



## ジュニア大使で芽生えた 国際意識を留学でさらに育む

ジュニア大使経験者でその後留学経験を積む人が多い中で、現在帝京大学3年生の川崎陽子さんは、91年4月から92年2月まで、イギリス北部にある帝京大学のダーラム校に留学した。そこでは授業全般は日本語で行われるものの、部活動や寮での日常生活はすべてイギリス人と共に行う。ジュニア大使などの経験から、「人と絶え間なく交流するには、相手からのアクションを待っているだけではダメ」と考えるようになった川崎さんにとって、今回の海外経験はどのようなものだったのだろうか。

### ●収穫は精神的な強さを得たこと

「留学を志望した動機は、外国生活を学生時代に経験してみたかったことと、英語をもっとブラッシュ・アップしたかったからですが、その背景にはジュニア大使でホームステイした時の楽しさを忘れられなかったことがあったと思います。

ジュニア大使として訪問したアメリカはとても開放的で、皆とすぐに仲良くなれたのですが、イギリスの人は気軽に声を掛けにくい雰囲気を持っていて、留学したての頃は馴染むのに苦労しました。でも半年近くも経つと友人の家に招かれて一緒に食事をする機会



も増え、会話するのが楽しくなって、だんだん迫ってくる帰国が嫌でたまらないくらい愛着が湧いていました。

この留学のおかげで英語が上達したことはもちろんですが、ほかにも精神的な強さというか度胸がついたような気がします。休暇中にはヨーロッパを旅していろいろなハプニングも経験したのですが、慌てずに結構うまく対処できたと思います。」

### ●国際交流の楽しさを伝えたい

川崎さんが所属した部活動はバドミントンとスキー。それぞれが自分の都合の良い時間に練習する自由なやり方に、部活動に対する基本的な考え方の違いを感じたそうだ。また、情報化社会と言いながら外国について必ずしも正しく伝わっていないことに以前から不満を持っている川崎さんが、「外国の人にも日本のことを正しく伝えられるようになりたいし、将来はこれまでの経験を活かして国際交流の楽しさを伝える仕事ができればいいなと思っています」と、抱負を語ってくれた。